リアけもの（仮）

麻技准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアけもの（仮）

【Nコード】

N2451J

【作者名】

麻技准

【あらすじ】

黒い包帯に包まれた少女。

赤く輝く髪を靡かせる少女。

蒼い薔薇の獣が生えた少女。

灰色の瞳で全てを見通す少女。

この世界には仮物かりものという、若者の周辺だけで発生する複雑怪奇な現

象が存在した。

僕はその仮物に遭遇する確立が極めて高い、普通の、ありふれた、ただの少年だ。

この物語は、四人の少女と僕が、そんな仮物と向き合ったり、逃げたり、四苦八苦しつつも自分達の生き方を模索していく、歩くような速さで展開していく物語。

壱之斬 伊丹傷(いたみべいん)(前書き)

空は赤かった。

しかも血が滲んだような、黒に限りなく近い赤であった。

僕は、走って逃げていた。僕を追いかける、何者か、から。

僕の住む町は既に瓦礫と化し、その間には幾つもの人間や動物の亡骸が散在し、腐臭を放っている。

腐った卵と腐った魚、足の裏の匂いと、三日間洗ってない口臭をミックスさせたような、そんな強烈な臭いである。

正直、鼻がもげる、因みに先ほど通った公園では、草花が全て紫色になり、萎れていた。

「なっ、なんなんだよ！僕が何をしたっていうんだ！」

僕は振り向かずに、背中に迫る『何か』に叫ぶ。

先ほど転んで、すりむいた額からは真っ赤な血が流れ、全身の筋肉や臓器、骨や神経が悲鳴を上げていた。

それでも、僕は走っていた。

後ろから迫る『何か』から出ている呪詛のような音が確実に近くなり、全身の血が凍る。

「うぎゃああああっ!?!」

そして、その『何か』はついに、僕の足に絡みついた。

ぬめっとした、あまりに力強い布のような触手であった。

走馬灯が、一瞬浮かんで、無情にも消えていった。

「さ……………早…乙女、姫…也……………」

断末魔のような叫びをあげ、『何か』が僕を見下ろす。

その『何か』とは、あまりに酷い造形の、全長5メートルほどはあ

る巨大な化け物であった。

まず下半身は蜘蛛だった、足が太い黄色と黒のまだら模様の蜘蛛の上部分に、腰がつかっていた。

腰上の胸には、鋭い牙と鼻をもった巨大なマンモスがくっついていた。

まるで勇者ロボやスーパー戦隊ロボのように付けられたそのマンモスは、顔面の右側の皮が削げ落ち骨が見えており、目にあたる部分の空洞には薔薇の花弁が付いていた。

そして両肩には肩あてのように刺々しい髑髏が付いており、そこから伸びる巨大な両腕は、灰色の包帯で包まれていた。

僕を拘束したのは、この包帯であった。

もちろんその腕の先端にある手も、紫色の爪が生えている。

そして、驚くべきはマンモスのついた胸の上についた『本体』。

4メートルの体の上に付いている『本体』は、セーラー服を着た、少女であった。

といっても、やはりただの少女ではなかった。

顔面は黒くぼやけており、その中央にある巨大な一つ目がひたすらに強烈である。

額には銀色の輪っかが突き刺さっており、腰まで届くほどに長い赤い髪は、風になびいている。

背中には、悪魔のような羽が生えている。

そして、華奢な両腕には、それぞれ物干し竿のような日本刀を持ち、それを体の前で交差させていた。

と、造形だけでも情報量の多い化け物は、僕を一瞬にして突き刺した。

「ぐあああああ!？」

一瞬過ぎて、どの体の部位の武器を使ったか、分からなかった。

ただ不幸な事に、その一瞬で僕は息絶えることが出来なかった。

大量出血し、骨や肉やらが表に出ってしまった僕は分厚い包帯によって四肢を拘束され、赤い空に掲げられた。

「姫也くん……だ……ダイ……だいす……き……ほ、本当に……せ
……かい……世界で……一番……大……好き」

狂気を孕んだ声で、死体になりつつある僕にすり寄り愛を囁く化け物（の本体の部分）。

さすがに女性の姿をしているため、いい匂いがした。

この世のものとは思えない、凄まじくいい匂いであった。

そのあと、僕は数え切れないほど殺された。

突き刺さり、焼き尽くされ、踏みぬかれ、吸いつくされ、猛毒に侵され、内臓でお手玉をされ、眼球を抜かれ、舌を切断され、尿道を包帯で侵食され、もぎ取られた腕を肛門に挿入され、エトセトラ、エトセトラ……

そして、息絶える寸前で、化け物は生気を僕に吹きこみ、元の瀕死状態に戻す。再び、殺戮するためだけに。

そんな状態が永遠に感じられるほどに、続いていた……

壱之斬 伊丹傷（いたみべいん）

人と人との境界は、どこにあるのだろうか。

僕と世界とを分ける線は、明確なものなのだろうか。

それとも、この空と雲のように、曖昧に変化していくものなのだろうか。

僕には、分からなかった。

この物語は、僕と四人の少女の物語。

この世界には、彼女達を『異端』と呼ぶ人達があまりに多い。

だが彼女達も、何の理由もなく、他者と異なる存在となったわけではない。

その器は人を離れても、中身はやはり人なのだ、と今の僕は思う。
僕の名前は早乙女姫也。

ポブカットの銀髪、二重のぱっちりとした（と、よく言われている）
瞳、少し縦に長い顔面。

身長は178センチ、体型は中肉中贅。

どこをとっても、どこにでもいる、普通の容姿である。

特徴がないのが特徴、とよく言われる。

それが、僕のちっぽけな器だった。

そんな僕の物語は、高校二年生に進級し初めて起こった事件から始まる。

それは、ある晴れた春の日の、昼休みの出来事であった。

「うわっと!!」

僕は、思わず声をあげてしまった。

教室に入ったら、顔面が黒い包帯に包まれた女が目の前に立っ

ただ。

午前中の授業は殆ど放棄し屋上で眠り、トラウマになるレベルの悪夢を見ていたので、実に一時間三十分ぶりの教室であった。その瞬間の出来事であった。

いきなりの事であったので思わず出てしまった叫び声に、クラス中の男女が振り返る。

「……………」
その少女らしき物体の顔面は、黒い包帯で、ミイラのようにぐるぐる巻きにされていた。

僕は目を丸くして、その顔面が包帯に包まれた少女をまじまじと見つめてしまう、見るな、という方が無理な話であった。

少女の体は、普通の女子高生の体型をしていた。

いや、僕の目から見ても、並の女子高生以上の体つきの良さであった。

身長は159センチくらいであろうか。

ちなみに…なかなかよくかなものをお持ちのようである。

しかし、そんな首から下の結構ハイスペックな女子高生の姿をぶっ飛ばすほどに、この少女の顔面にはインパクトがあった。

いくらなんでも、目や口元すら露出していない、というのには流石に驚かされる。

空気を吸うために、口元は少し緩めに巻いてはあるが、視界は恐らく無いようなものである。

「……………」
まだ、少女は僕を見ているようであった。

というか僕がまじまじと見ているから当たり前なのだろうか。

僕のクラスに、こんな少女がいただろうか？

「おい、やべえぞ…」

「うわあ、やっちゃったね早乙女君…」などとクラス中の男子も女子もザワザワとこちらを見て、噂話を始めていた。

でも、こっちが視線を移すと全力で視線をそらすという。

「……………」
クラスの中の皆が、僕達に突き刺さっているが、それでもこの少女は僕を見つめているようであった。

「お前……」
そういえば、ポケモンでこういう奴がいた気がする。

ドンジャラ。

いや、モンジャラとか言ったか。

もしかしたら、この人（？）はネタか、ネタでやっているのか。頭部を丸ごと覆うほどの大怪我をおった人間が普通に登校しているわけがないし、包帯が黒い必要性が無い。

きつと、クラスのみんなが仕組んだドツキリ企画なのだろう、そうに違いない。

ならば僕は、やるべき事がある。

「お前はゲルシヨツカー首領か……」

とりあえず、ツツコミを入れる。

流石に少女に物理的に突っ込めないため、モーションだけのツツコミであった。

完璧だ。

僕のツツコミは完璧過ぎた。

マントこそないものの、この黒い包帯で顔面を包み込むセンスはきつと悪の大首領のコスプレなのだろう。

最近のつまらない素人芸人のネタなどよりも面白い絡み合いを、教室の後ろの入口で行ってしまう自分の才能が怖かった。

このコスプレ少女となら、オンエアバトルに出れるかもしれない。などと思っていた矢先であった

「……」

少女は、両腕で僕を突き飛ばして廊下へと駆け出す。

「ぬっわっ!!」

僕は思い切り背後に転倒し、尻餅をつき、そのまま廊下の壁で後頭部を強打した。

痛い。

「いつつ…」

頭の上を規則的にヒヨコが往来し豆電球が点滅する。

しかし、その傷みで、やっと彼女の気持ちの断片を感じることは出来た

その黒い包帯はネタではない、と言うことなのだ。

しかし、彼女は泣きも、怒りもしなかった。

シヨックを受けて悲しいなら、咄嗟に僕を突き飛ばすことはしないであろう。

怒りや憎しみの感情があったならば、マウントポジションで僕をもっと殴りつけているであろう。

その少女のとった反応、それは拒絶であった。

そう、僕は感じた。

もう、関わらないでくれ、ということなのだ。

「つつつか、あいつは何者だ?!」

僕は事態の一部始終を完全に見ていたクラスの皆に向かって問い掛けた。

その問い掛けに、クラスの約半数の生徒が黙り、まるで何も起きなかったかのように、無関心を決め込む。

「何言つてやがる早乙女、奴は伊丹傷いたみ・べいんだろ?」

一番僕に近い場所にいた男子生徒Aが、仕方なさそうに問いに答え

た。
え?なに?知らなかったの?的な口調であった。

「いたみ、ペいん？イタミペイン…？」

僕はその奇つ怪な名前を反芻する。

伊丹傷：

高校生活に入つて二年目であるが、記憶を辿り彼女を探す。

体育祭、文化祭、授業、朝礼、エトセトラ、エトセトラ…

「あの人、前から暗くて人の話聞かないし、なんか取っ付きにくかつたけど…最近だよ、アレをしてるの」

さっきまで無関心を決め込んでいた女子共が口々にそんなことを言いながら、ガヤガヤと騒ぎ始めた。

やれ、彼女は毎日、授業以外は教室内にいない、とか。

やれ、彼女は本物の化け物だ、とか。

やれ、包帯の中身は無数の蛇だ、とか

全く、女とは怖い生き物だ。

週刊誌並の情報収集能力と、ラノベ作家が裸足で逃げ出すほどの勝手な想像力をもつていやがる。

まあこの場合問題なのは、女子達の話では事実と想像がごっちゃになつていて、全く彼女の実態が分からない、ということなのだが

「つまりアレか、僕はとてつもなく場違いな反応をしてしまったわけか」

「まあ、そうなるわな」

男子生徒Aがうんうんと頷く、その周囲の男子も同様のリアクションである。

女子共が口々にサイテー、などと陰口を叩く。

全く、酷い奴らである。

今の今まで散々、一人の少女をさも空気のように無視しておきながら、そんな少女に口をきいた僕については散々に言いやがる。

まあ、僕も彼女に気づかなかつたのだから、全く責められる立場にないのだが。

だが、都会の無関心とは恐ろしいものである、僕も未だに彼女の存在が記憶から出て来ない。

「というか、こんなことしてる場合じゃない！」

やっとそのことに気づいた僕は、走り出した。

そう、今重要なのは彼女に謝罪することなのだ。

少女があんな包帯で顔を隠すのには、深い理由があるのだろう。

それを、ネタだと思いついたのだから、深く傷ついたら違いない。

やれやれ、自分のデリカシーの無さがつくづく嫌になってくる。

教室から飛び出し、ただっ広い廊下を走る。

無数の生徒の間を、止まることなく、走った。

記憶を辿っても、まだ思い出せない少女、伊丹傷を負いかけるために

「おつ、昂おぼろじゃないか、いい所に」

そして、階段に差し掛かった所で、僕は一人の少女と鉢合わせになった。

本当にいいタイミングで、こういう状況の際一番頼りになる人が現れた。

そいつは僕が最もよく知っている少女であり、僕を最もよく知っている少女であった。

北王子昂きたおつじ・すはる

この高校に通う同じ二年F組の、出席番号27番。

僕と同じく保健係で、帰宅部員。

すらっとした長身、モデルのような体型。

でる所はそれなりに出ている、そしてそれを包むセーラー服。

ショートヘアの黒髪に、中性的な顔立ち。

そして、真っ直ぐな大きい瞳。

いつも凜としており裏表がない彼女は同性の固定ファンがこの学校には多く、ボーイッシュを通り越してカッコいい、という印象だ。

因みにパンチ力100トンであるが、今その事はあまり関係ない。

「どうした姫也、急いでいるようだか？」

昴は、焦っている僕を見つめ、小さく首を傾げた。

出くわしたのが、昴で本当によかった。

昴は、差別的な感情はクラスの皆より少ない。

彼女は他人を色眼鏡で見ることがないから、多分この学校の殆どの生徒と会話したことがあると思う。

彼女ならば、僕ですら素でスルーしていた、空気のような少女のことも、普段から気にかけているハズだ。

だから、彼女ならば、他のどの生徒よりも高い確率で伊丹の行方が分かるのではないかと、僕は思ったのだ。

「お前： よかった、いい所に。見なかったか？あいつを」

昴はキョトンとした表情で、肩をすくめた。

そして数秒間瞳を閉じた後、申し訳なさそうに答えた。

「… すまないな姫也。私も流石にそこまで察しがよくないんだ。

その聞き方だと、私は誰のことだか分からないから答えようがないんだが：」

ああ、確かにそうだった。

今のは僕が誰を探しているのか、完全に分からない質問であった。焦っていると、僕は日本語すらままならないのか。

そんなキャラ設定、嫌だな。

「あ、伊丹さんなら、走って階段を昇っていったが」

お前、天才だろ。

「ああ、その伊丹に用なんだ、サンキューな！」

「例には及ばない、午後の授業までには戻れよ姫也。」

「ああ！！」

天才的な回答能力に助けられた僕は短く礼を言うと、階段を駆け上がっていく。

とりあえず彼女には、放課後好きなお菓子でも差し入れよう。

僕のいた場所が校舎の三階であり、五階建てのこの学校にはあと、伊丹が行けそうな場所は限られていた。

鍵がかかっているため、特別授業を行う音楽室や視聴覚室などには、まず行けないであろう。

では、鍵がかからず、少女が駆け込める場所はどこか？

その条件に当て嵌まる場所は、一つしかなかった。

そこは、あるうことが、屋上であった…

「いてくれよ、つつうか… 早まってないよな?!」

十分有り得る話だ。

普段から全生徒にスルーされているのに、あるうことが悪の総統呼ばわりされたら、世の中を憐みたくもなるものだ、僕ならそう思う。僕はいよいよ焦った。

屋上は鍵があるのだが、数ヶ月前から不良により破壊され機能をしていないのだ。

だから、あれほど鍵をしつかり直しましょうよ、と先生共に言ったの。

「間に合ってくれ… 頼むから、間に合ってくれよ！僕が完璧に悪かったから、早まるなよお！」

そう独り言をぼやき、あわよくば彼女に届くように、とそんな物理的に叶わない祈りを強く願い、僕は階段を駆け上がった。

「あ… あれだ！あれだよ、もう！」

そして最上階の階段に到達した僕の視界に、冷たく閉ざされた扉が入ってきた。

「間に合えーッ！！」

階段を駆け上がってきた勢いそのまま鉄で出来たドアを蹴り上げると視界に太陽の光が差し込み、次に真っ青な空が広がる。

フェンスに囲まれた屋上は、僕がよく使用している日光浴の場所で

あった。

雨よけのためにブルーシートに包まれている段ボール箱の中には、ピクニック用のシートや雑誌、粘土、菓子などが無数に入っている。授業がダルくなった時、眠い時、よくここに来るのだ。鍵をかけようと言っても聞かない教師たちに呆れた僕は、それならばと、ここを自分の癒しスペースに改修したのだ。しかし、その楽園が彼女の終焉の場所となってしまった。

「そんな……う、嘘だろ？冗談だよな？」

僕は、戦慄した。

暖かい日差しが照りつけているはずなのだが、全身が凍りついていてた。

僕の放った無神経な一言が、彼女の最後の、一線を越える後押しになってしまった、というのか。

この瞳は、見つけてしまったのだ。

錆びたフェンスに引っかかり風に揺れる、黒い、ひたすら黒い包帯。思考が堂々巡りし、ただ立ちつくしていた。

こんなことが、あると言うのか。悪夢だったら、そろそろ覚めてくれと思ったが、いつまでも覚めない。

目の前の出来事は、紛れもない事実であり、変えようのない現実であった。

ただただ、僕は泣いていた。

校舎の裏に植えてあるひたすら巨大な桜の木から風に乗る、花が舞い散る。

そんなに世界は暖かな春の日という形容が似合うというのに、僕は屋上の地面に膝をついて頭を打ちつけ、自責の念に駆られるしかなかった。

校舎の下から、女生徒の悲鳴が聞こえ、数分後に、遠くの方からサ

イレンの音が聞こえてきた。

その音は血まみれの僕の耳に、ずっと、重く響いていた

続く。

壱之斬 伊丹傷(いたみべいん) (後書き)

登場人物紹介

さおとめ・しめや

【早乙女姫也】

本作の主人公。

ボブカットの銀髪、二重のぱっちりとした瞳、少し縦に長い顔面。身長は178センチ、体型は中肉中贅。

様々な事件に巻き込まれる体質の少年で「やれやれ」が口癖。

お人よしだが、「そこまでいい人じゃない」と自称している通り、そこまで善人ではない。

趣味はアマチュア無線と粘土細工、昭和文化の研究(中でも60～80年代の特撮等が好き)と、かなりインドア派。

義理の母と妹がおり、本人は自覚がないのだがかなりのシスコン。居眠りが得意技で、意味不明な夢を見る。

式之斬 黒包帯

錆びたフェンスに引っかかり風に揺れる、黒い、ひたすら黒い、一切れの包帯。

僕の不用意な一言により、死んでしまった少女のものであった。

彼女の名前は伊丹傷^{いたみ・べいん}。

黒い包帯に包まれた顔面に、少女の体。

今になって僕は思い出すことが出来た、彼女は確かに、僕のクラスにいたことを。

あれは確か去年の学園祭の時のクラスの出し物の看板制作の時であった。

僕と一緒に看板をさっさと書いて、それぞれ帰宅したのだ。会話はあまりなかったが…

あの時の女子生徒が、確かに伊丹傷だった。

だが、僕は彼女の顔を思い出すことが出来ない。

そして、僕は彼女の声を思い出すことが出来ない。

確かにそこにいた、ということだけ、僕の脳裏に蘇ったのだ。

僕も所詮、彼女をスルーし続けたクラスの皆と同じということなのだろう。

全てが手遅れであるが、もう今更何を言っても言い訳や詭弁にしかならないのだろうか、僕は…

もし、出来ることならば、彼女と話をしてみたかった。

自責の念からではなく、本当にそう思えた。

彼女にとってこの世界は、どのように写っていたのか。

何をみて、何を思っていたのか、僕は知りたかった。

そしてたわいのない話をして、笑いあいたかった

「あ、あ…あのう… 大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃない… 僕は最低だ、手遅れだったんだ……」

そう、こんな風に。

へ？

「ぬなっ!？」

振り向いたその先には、相変わらず黒い包帯をした伊丹がいた。

幽霊になって、僕に語りかけてきたというのか。

それもそうだ、僕がきっかけとなったのだから、僕は何を言われても、何をされても因果応報というやつなのだろう。

17歳の春に散るとは、短い人生だった。

まだやりたいことも沢山あったし、僕はこの世の中に未練ありまくりなわけであるが。

サナトリウムで療養している妹が悲しむだろう、僕はそれがまず気になった。

あいつは僕が週に三日面会に来るのを何よりも楽しみにしているの
で、僕がいなくなったらどうなってしまうのか。

自慢の妹だった。

僕より二つ下の彼女は頭もいいし、スタイルだって抜群、料理もプ
口並みに上手いし文才もある、絵を描かせても、字を書かせても、
何をさせても人並み以上にできてしまう。

性格はおしとやかで、三つ指について旦那の帰りを待つような、そ
んな一昔前に絶滅してしまった『大和撫子』という言葉が本当に似
合う完璧な少女であった。

僕と血は繋がってはいないが、自慢の妹だ。

ただ一点、ただ一点だけ、病弱なのだ。

病弱で、状態の悪い時はいつも咳き込んでいる。

彼女はどんなに状態がよくても、この街の外に行ったことがないのだ。

そんな妹を泣かせるのは、どうしても嫌であった。

とにかく、僕はこの幽霊と化した伊丹に消されてしまうのか。

そんな事情も、お構いなしに。

嫌だ。

やっぱり、嫌だった。

死にたくない。

生きていたい。

妹の件もそうだが、まだ僕にはやらなければならない事がある。

伊丹傷を傷つけたことは完全に僕が悪い、だが、死にたくない。

もう理屈ではなかった、僕は死にたくないのだ。

僕は、自分が死ねば解決するなら命はあげましょう、と言えるほど、

お人よしではないのだ、綺麗な人間ではないのだ。

だってそうだろう？

そんな事を平然とやれる人間なんか、この世の中にいないと思う。

そんなに人間が、善なる心だけで出来ているとは、僕は到底思えない。

い。

とにかく僕は伊丹に、殺されなくなかった。

「あ、あああのう……て、手遅れかもしれませんが……私、生きてますけど……」

え。

僕は、勘違いをしていたようであった。

確かに、彼女の言うとおりに眼前にたっている伊丹傷は足がしつかりとあるようだし、なによりその全身から生気を感じられた。

しかし、彼女は身投げしたはず、投身自殺したはずだ…

「えっ、じゃあ、伊丹さん……あ、ああの包帯は……」

僕は、恐る恐る幽霊疑惑のある伊丹に話かけ、未だにフェンスに引っかかっている黒い包帯を指差した。

「かつ、かか、風で飛んだみたいですよ……」

外では絶対に、一本も取れないのに、と彼女はとても小さな声で付け加えた。

「え？じゃあサイレンは？女子生徒の悲鳴は？」

「サイレン……はさつき廊下で貧血で倒れた子がいたんで、それだ
と思います。悲鳴は、最近よく学校の庭にシベリアンハスキー
が迷い込んでくるので、そのリアクションだと思います……多分、
おそらく……きつと」

なるほど、全て僕の勘違いだったということか。

しかし、僕は貧血の子なんて気にもとめず走ってたが、よく伊丹は気づいたな。視界、かなり狭いだろっに。

そして、シベリアンハスキーを野放しにしている街というのは治安的にどうなのだろうか。

いや、そんな事は今、さほど重要ではない……

「そ……そうだったのか、ひい」

腰が抜けた僕は地面にペタンとへたれこむ。

「私、じ、自分が大切ですから……そういうこと、考えたことないですよ……」

そうだ、命は大切なんだ、綺麗ごとではなく。

だから、僕は本当に安心した。

「さつきは……本当に悪かった、すまない。ごめん……」

僕は間抜けな姿勢のまま、謝罪の言葉を口にした。

「え？え……え？」

何が？

といった感じで、首をかしげる伊丹。
いやいや、僕が謝罪するとしたら、あの発言しかないでしょう伊丹さん。

「君をゲルシヨツカー首領呼ばわりして悪かった……弁解の余地もない、俺が圧倒的に悪かった。」

正座し両手と頭を地面につけて、土下座をしていた。
命を差し出せない僕の、最大限の謝罪であった。

「ええ…と、あの……その」
僕はそんな姿勢だったからよく分らなかったが、彼女はうるたえているようであった。

ただでさえ途切れ途切れに紡いでいた言葉を、更に詰まらせていた、よほど言いにくいことなのだろう。

「ゲルシヨツカー首領って、何ですか？」

「…あ」

間拔けな声を出していた。

なるほど。ああ、そりゃそうだ。

ゲルシヨツカー首領を、彼女は知らなかったのだ。

今の若い子が仮面ライダー（初代）に出て来る最後の敵ゲルシヨツカー首領の容姿を知っているわけがないのだ。

むしろ、僕のように知ってる平成生まれのほうがマイノリティなのだ。

「あの…大丈夫ですか？頭をあげてください……」

彼女の優しい言葉に甘え、僕はゆっくりと立ち上がった。

よかった、彼女が傷つかなくて本当によかった。

「さっきは、突き飛ばして……す、すみませんでした…話かけられるの久しぶりだったから、びっくりしちゃって……」

今度は彼女がペコペコと小さく頭を下げ、謝っていた。

謝る必要など、君に非など、ないというのに。

「いや、大丈夫……」

僕はいつもトラックを片手でぶっ飛ばすような奴に巻き込まれているのだから、普通の少女の腕力で突き飛ばされることなど、蚊が刺したようなものだ。

全く問題はない。そもそもこちらが悪かったのだし。

「ありがとう……あ、伊丹……さん？」

僕は核心に迫ろうとしていた。

このまま、笑ってお開きにすることも出来たが、それでは何の解決にもなっていないのだ。

それでは僕は、彼女を無視してきた奴らと同じクラスメイトの一人で終わってしまう。

彼女も、このままクラスの中で空気化して、まるで何もないかのような存在として存在するのが、僕は納得できなかった。

それだけは、僕は嫌だった。

「は……はい？」

伊丹は、首を傾げた。

「……その包帯、傷跡を隠すためのものじゃ……ないよね？」

どんな人にも分かると思うが、核心とは、伊丹傷の抱える問題とは、黒い包帯のことだ。

そう、伊丹の頭部を覆うこの黒い包帯、これは人の手によるものではない。

先の彼女の「どうやっても人前では外せない」という呟きから察するに、この黒い包帯はきつと彼女と世界を隔てる存在なのだ。

仮物^{かりもの}。

この世界で異端なるもの、異端なるものと同化したもの、そういうものを、僕は仮物と呼んでいる。

名付け親は僕ではない、ある男だ。

そいつがなぜ仮物と呼んでいるか僕は知らないが、とにかく、とりあえず、このようなケース全般を仮物と呼んでいる。

僕は、僕の周囲の人間は、少なくとも、そう呼んでいる。

「……………」

彼女は、返答に困っているようであった。

黒い包帯に隠れて表情はやはり分からないが、多分相当に困った顔をしているのだろう。

僕もあまりそういう表情をしてほしくないのだが、こう質問するしかないのだ。

僕が彼女に対して無関係である事を止めるための、どうしても必要な質問であった。

でも、勇気を出して質問した甲斐はあった。

やはり、そういうことなのだ。

黒い包帯は、仮物なのだ。

「君のその……黒い包帯、なんとかなるかもしれない」

僕は彼女に告げた。

なんとかなる、と断言できないのが、僕の情けないことであるが。

なんとかなる、と言ったら嘘になるかもしれないからだ。

なんとかならないかもしれないのだ。

どうにかなるかは、半分以上、僕の力ではどうにもならないからだ。

「へ？」

彼女はキョトン、としていた。

自分を散々悩ませている黒い包帯かりものがどうにかなる、と思いきもなかったのだろう。

「そ、そんなんですか……私のコレ、なんとか……何とかなるんですか？」

彼女は少し興奮しているようだった。

まだ、少しオドオドとしているようであったが、それでも、彼女は自分の頭部を包む黒い包帯の一部を摘みあげ、僕に三歩だけ、近づ

いた。

「仮物そいつに詳しいやつがいる、俺の友達だ……なんとか、なるかもしれない。僕が、出来る限りなんとかする」

そう、心当たりがある。

僕の友人、というか腐れ縁的な存在。

そいつは、仮物の知識に長けていて、自称、仮物事件解決のセミプロである。

セミである所が、多分にひっかかるのだが。

「私は……」

彼女は数分間悩んだ結果、首を縦に振った。

僕は、彼女に約束をとりつけることが出来たのだ。

僕の友人の、仮物に詳しい奴。

今日の放課後、そいつにこの件の相談をするのだ。

どうなるかはわからない、だが今よりは、何もしないまま手をこまねいているなら、前に進んだ方がいい。

だから、今日をその一歩にしたかった。

明日ではなく、今日。

今日、彼女を困らせる仮物を何とかすれば、明日から彼女を取り巻く世界が変わる。

お節介でも余計なお世話でも偽善でもなんでもいい、僕は彼女の力になりたかった。

だから、そのための約束であった。

「あ……あと、伊丹さん、一つだけいいかな」
チャイムが鳴っていた。

午後の授業の始まりを告げる、電子音であった。

そして、桜が舞い散る晴れた空の下、僕は屋上のフェンスにもたれかかり、全身の力を抜いた。

本当に、長い休み時間であった。

しかし、放課後は更に長くなることを覚悟している。
そんな僕の背中に、少しだけ暖かい風が吹いていた。

「は……はい」

彼女はこくこくと頷き、僕の言葉を聞き逃すまいと、真剣な様子で身を乗り出した。

「一生のお願いだから、ゲルシヨッカー首領だけは絶対にググらないで」

続く

式之嘶 黒包帯（後書き）

【登場人物紹介】

いたみ・べいん
伊丹傷

17歳。

高校二年生の少女。

高校一年の最後あたりで仮物『黒い包帯』が出現、今に至る。

黒い包帯は顔面を完全に包んでいるが、締め付けているわけではなく、若干緩く巻き付いている。

隠れていて全く見えないが、銀色の長髪、瞳はぱっちりとした二重瞼である。

首から下は普通の女子高生であり、早乙女曰く、並以上のモノを持っている、らしい。

性格はかなり引っ込み思案であり、積極的になにかをやるうとすることは少ない。

また、良く言えばマイペース、悪く言えば感覚が他人と少しズレていることもあり、クラスでは浮いた存在である。

カドケシ集めと家庭菜園、ネット検索、昼寝が趣味。

参之嘶 友達（前書き）

今回は主人公視点ではないです。

参之嘶 友達

黒い包帯が出現し始めたのは、丁度今から半年くらい前のことであつた。

最初は自分で、口元にマスクをしていただけだつた。

表情を隠すための、普通の風邪マスク、勿論白い。

人と話すのが苦手だつた、空気を読むのが苦手だつた。

話題が合わなかつた、最近の芸能人やファッションの話、諸々こちらには興味がなかつた。

だから、大勢の中の一人でよかつた、他人と話すのは本当に必要なときだけでよかつた。

空気のような存在を望んだ。

それでいいと、その頃は思っていた。

そして、休み時間も放課後も、図書室の一角で隠れるように本を読んでいた。

放課後はホームルームの終わりとともに駆け足で家に帰っていた、特にやることなどないというのに。

そして帰宅したらネットサーフィン等々。

学校に行く以外では、完全に引きこもり状態であつた。

だからであろうか、ある朝目覚めると、顔面を黒い包帯が覆っていた。

数日間は、ショックのあまり学校を休んだ。

そして、勇気を出して登校したら、さらにショックなことが起きた。

最初は数人のクラスメイトが、大丈夫？どうしたの？と問いかけてくれたのだが、それだけだつた。

そう、特に關心をもたれることもなく、私の存在は、空気となっていた。
包帯の中がどうなっているか分からない、だが顔を洗う時や頭を洗う時、食事の際など必要最低限の時は自然に前後に移動してくれるため、最悪の事態だけは防げていた。
だが、家の一步外に出たら、この包帯は全く外れなかった。
まるで、世界から隔絶されたような気分であった

「って、感じらしい。なあ、とりあえずこつち来てくれよ。僕一人じゃ……」

伊丹傷いたみ・べいんが先に話した大方の事情を、早乙女姫也は携帯電話で話していた。

放課後、この街の中心にあるファミレス、ガで始まりトで終わる赤い看板のファミレスの中、早乙女姫也と伊丹傷は相向かいに座っていた。

ちなみに早乙女はパフェを注文、伊丹はコーラを注文した。

「……………」
人前では、ストロー一本の隙間しかできないためにコーラしか頼めなかったが、早乙女が注文したパフェは凄まじく美味しそうであった。

ジョッキのように巨大な容器に、暴力的なまでに盛り付けられた果物とクリーム、エトセトラ、エトセトラ……
彼は甘党なのかな、と伊丹は生唾を呑んだ。

『ああ、だから無理なんだって姫也くん。今日はどうしても、どうしても外せない用事があるから、その女の子の件はまた今度で』

どうやら、話は難航しているようであった。

早乙女が休み時間に言っていた『甘噛』という人物は、彼らが通う公立ビルガモ学園の隣町にある公立プリズマ学園に通っているらしい。

だが、先ほどから早乙女は困ったような顔で、携帯電話に向かって懇願していた。

「……………」

伊丹は、少し不安になっていた。

完治するという希望は最初から持ち合わせていないが、大丈夫かな、という感情が彼女の中で先ほどから生まれてきた。

「ええっ？マジかよ！頼むからなんとか」

見えないというのに、携帯をテーブルに置き、拜み倒す早乙女。

『キミの妹ちゃんに頼まれてる本を届けるって大切な任務なんだけど』

声の主はそれでもボクに來いと？というようなニュアンスで、早乙女に言い放つ。

ぐう、と唸る早乙女。

「そ、それは大切だ、だが…」

『「僕の猟奇的な彼女を中心に心中」って本なんだけど、妹ちゃんかなり楽しみにしてたよ？「今度映画になるから、早く元気になって兄さまと一緒に行くんです、だから原作は読んでおかないと」って言ってた。』

「ぬうう…」

『あ、ごめん。本人から言わないでって言われてたんだ、これ』

数十秒、妹と伊丹を天秤にかける姫也。

いや、数十秒天秤にかけた所で答えがだせるほど、彼は決断力を持ち合わせていなかった。

伊丹の今抱えている問題に対処することは確かに自分最重要課題ではあるが、妹に本を届けることも、それと同等の重みがあるのだ。

「……………」

事態を呑みこんだ伊丹が、「なら今度でいいです、今日じゃなくて」

と言いかけた、その瞬間であった。
助け舟を出したのは、『甘噛』の方であった。

『なんなら対処法、今教えるけど』

電話の主、甘噛は建設的な意見、最良の方法を提案した。

「頼むわ！後で報酬はちゃんと渡すから！」

天秤の前で溺れるものは即、決断し、藁をもつかむように再び頭を下げた。

『ブリックパッカーっ、ね。』

甘噛はいつも、スーパーで80円くらいで売っているブリックパッカーの豆乳ジュースで事件の解決に協力してくれる、今回も、そのようであった。

「安いもんだ」

この報酬で本当にいいのか？といつも姫也は内心思っている。

『本当はボク、姫也クンのキッスがいいんだけどなあ…』

「勘弁してくれ」

『別に口でなくていいよ、うなじでも』

「ある意味口より無いわ」

『じゃあ、ほっぺは？』

「やだ」

『じゃあ手！このマシユマロみたいなボクの手なら…』

「無い」

『わかったよ姫也くん、ほんとつれないなあ…じゃあ超妥協して投げキッス』

「今度してやるよ、ヘドラのソフビにな」

『うわっひどっ！相変わらずだなあ姫也くん…まあいや、それが君だし、さて…』

閑話休題といった様子で咳払いし、甘噛は話を切り出した。

『ちよっとその娘に変わってくれない？』

「あ？ああ……こういうのは本人に聞かないとなんだよな、確か」
仮物に対する経験の差か、早乙女は『甘嚙』の言うことを素直に聞いた。

『うん、こういうのは直接話しをしてみないと、駄目だから。姫也クンの視線をくぎ付けにした女の子に、ボクも興味があるしね』

くすす、とからかうような笑い声が電話の向こうから聞こえた。

「ちょ、そんなんじゃないやねえって……」
伊丹さん、ごめん、奴は本当に重要かつ不可欠な任務についてるから、電話相談って形になつちやうんだけど……」

恥ずかしさを隠すように、『甘嚙』とつながったままの携帯を伊丹に差し出す早乙女。

「え……あ、はい、ありがとうございます」

ぺこりと黒い包帯に包まれた頭を下げ、伊丹は電話を受け取った。

『あ、どうも。とりあえず自己紹介しておく、ボクは彼の恋人のあまがみ・いのり甘嚙祈理です。こついったケース仮物全般を対象に解決にあたる、セミプロ的な存在です』

電話の主の甘嚙はとても澄んだ、綺麗な声であった。

声優でいったら、田村ゆかりのような声であった。

伊丹は少し驚いた。

「えっ…… そうなんですか……」

『そう、あくまでセミだからね。プロは莫大なマネーを出さないと動かない守銭奴が多いけど、ボクなら安心だよ、彼の頼みだもん、
プライスレスでザクッと解決するからね』

いや、別にセミプロであるかプロであるかを、伊丹は聞きたいのではなかった。

自分の眼前に座る彼、早乙女に彼女がいる、という事実に対する反

応であった。

「何か… 勝手なことを言われた気がする」
「ぼやきながら、早乙女はパフェを食っていた。」

「あの…この包帯なんですけど…」
話を切り出そうとした伊丹の小さな声を、甘噛は遮る。

『その仮物、黒包帯（仮）だけど、それは完治には時間がかかるよ』
いきなり結論から言われ、言葉を失う伊丹。

「え…」
戸惑う伊丹に、甘噛はさらに続けた。

『ボクは嘘はつけないから、はつきり言うけど最短で半年、最長で一生、かな』

綺麗な声で淡々と言われ、伊丹は握っていた携帯を落としそうになった。

「いつ……一生……」

ああ、やっぱりそうなんだ、と伊丹は、あの日味わった絶望を再び味わった。

わかっていたんだ、そんなことは。

この包帯を排除するのは、そんなに簡単じゃない、ということくらい。

『でも早く治したいなら、まずは彼と友達になること、かな』
彼女の解決方法に、伊丹はキョトンとした。

「と… 友達ですか？」

『うん、友達。黒包帯（仮）はきつと心因性の仮物だから、自分で何とかするしかないんだよね。あとは自分で分かるよね？』

他人に言われ、伊丹は静かにうつむいた。

「……」

彼女は自分で気づかないようにしていた解決方法に、気づいたのだ。うすうす感じてはいたのだ。

世界と自分を隔絶する黒包帯（仮）が、自分の願いが、歪んだ形で叶った姿であることを。

確かに、黒包帯（仮）が出現し、伊丹傷という少女はクラスの空気になることが出来た。

そう、それが彼女が自分で望んだ事であったのだ。

しかし、今の願いは違う。

あれほどまでに願っておきながら勝手だとは思うが、今は違う。

今は、この目の前の自分と同じ歳の少年や、よく話かけてきてくれる少女である北王子昴とも一緒に視界で再び世界と向き合いたい、今はコーラだけが飲めないが、一緒に食事もしてみたい。

そう願っている、自分が、確かにいるのだ。

「私に…なれますか？」

恐る恐る確認をとる伊丹。

自信がないから、背中を押してほしかった。

この見たこともない少女、甘噛祈理に。

『それは君次第、ボクが代わりになれないからね、君のこれからは自分次第。人生ってそんなもんだよ、多分……少なくともボクはそう思う』

しかし、甘噛という人は名前の通りに甘くはなかった。

「そう……ですよね、分かりました。私、がんばってみます」

甘くはないが見ず知らずの人に対し、ここまで考えてくれる優しい人なのだな、と、伊丹は感じた。

『ん、頑張ってるね、応援してるから。じゃ』

ブツン、と携帯電話は切れた。

伊丹はその携帯を胸に抱き、少しの間、瞳を閉じていた。

「あの……お話、終わりました」

携帯を早乙女に返し、一安心した様子の伊丹はストローでコーラを一回ほど啜った。

やはり他の人と飲むコーラは、自分一人で飲むコーラの何倍も、何十倍も美味しく感じられた。

「そう、話は聞こえなかったけど……大丈夫そうだね、なんとなく、だけど」

パフェを食べ終わった早乙女がスプーンを置き、口の周りのクリームを拭きながら問い掛けた。

「どうやら、パフェを黙々と食べながらも、真剣に伊丹の様子を見つめていたようである。」

「そう、感じますか？」

伊丹の問いに、早乙女は少しだけ笑いながら答えた。

「だって、ほら」

気休めではなく、早乙女は彼女に、大丈夫と言うことが出来た。

早乙女が、表情が読み取れないが彼女が大丈夫と思える理由は単純ではあるが、しかしはつきりとしていた。

早乙女が指差す先には、再び伊丹傷の頭からはがれ落ちた三枚の黒い包帯が、領収書の上に乗っていたのだ

続く。

参之嘶 友達（後書き）

次回

第四話 北王子昂きたおうじ・すはる

お楽しみに。

四之斬 北王子昂（きたおうじ・すばる）（前書き）

夜空には、一つの巨大な円盤が浮いていた。

僕達の住んでいる街は、その巨大な円盤から放たれた、一体の巨大な怪獣に破壊されていた。

その怪獣はサメのような肌をもち、全身は金色であり、体の造形はゴジラに近い、典型的な怪獣であった。

頭部は二つに分かれており、その頭部だけ風呂場の風呂桶を逆さにしたような機械で出来ており、鋭いアンテナが一つずつついている。

「地球人よ、ただちに全面降伏せよ。ハイパー防衛隊の基地は壊滅した。我々ノルマンチブゴス星人に降伏すれば、月面都市に移住を約束し、全人類の生命を保証する。降伏しない場合は、70億の人類を抹殺する」

空に浮かぶ円盤からは、宇宙人の声が響く。

宇宙人の、史上最大の侵略が着々と進行されていた

早乙女姫也、つまり僕は、既に破壊されてしまった防衛隊の基地にいた。

防衛隊の基地は山中にあり、その近くには湖がある。

僕は、戦闘機が飛び立つための滑走路の砕け散った地面を踏みしめ、静かに立っていた。

因みに、今僕は自衛隊のものを改造したような、オレンジ色の戦闘服を着ている。

「あ、あの……話って、何ですか？こんな時に、早く戦わなきゃ！丸っこいヘルメットを被り、僕と同じ戦闘服を着た伊丹傷が燃え盛

る街を見ながら、重そうな重火器を抱えて僕を叱責した。
勿論、彼女の顔面は見えない。

普段の彼女の静かな感じが全くしない、勇敢な態度であったが、僕は冷静に続けた。

「傷、大事な話なんだ。とつても、大事な話なんだ」

「……」

僕の真面目な顔を見た傷は、静かに重火器を下した。

僕は、夜空を見上げた。

燃え盛る街と反対方向の空には、沢山の星々が輝いていた。

「傷、君は僕に戦う意味を教えてくださいね……『絆』だって」

「そう、『絆』だから……」

伊丹はふくよかな胸を押さえながら、こくり、と頷いた。

この言葉は、前に怪獣を狙撃する任務についた時に、彼女から聞いた台詞であった。

その頃、僕は状況に流されて、嫌々戦っていた。

だが、今は違う……

「だから僕は戦う、でも、これが最後になるから……君には言うておきたいんだ」

僕が口にした不吉な言葉で、伊丹は明らかに動揺していた。

「さ、最後って……」

意を決して、僕は『真実』を口にした。

「傷、僕はね、人間じゃないんだ！ネヴユラ遊星から来た、スペクトルセブンなんだ！」

背景の湖が光輝き、BGMでシューマンの曲がかかっていた……

四之壱 北王子昴（きたおうじ・すばる）

早乙女姫也がそんな感じの夢を午前中の授業中に見た、晴れた日のことであつた。

ある都内の高校の屋上から、今回の物語は始まる。

二畳ほどはあるブルーシートが敷かれた校舎の屋上に、三人の高校生姿があつた。

折りたたみ式のアウトドア用のチェアに深く座り、早乙女姫也は桜色に染まっっていく街を眺めながら弁当を食べていた。

銀髪のパブヘア、少し縦に長い顔面。

身長は178センチ、体型は中肉中贅。

どこをとつても、どこにでもいる、普通の容姿であるこの青年は、学校の屋上に様々な私物を去年の中ごろから少しずつ持ち込み、自分の領土としていた。

と、言うのも、自殺防止に早く屋上への扉の鍵を直すように嘆願しても、先生方が全く動かなかつたため、その反発心が作り上げた空間でもあるわけだが。

「ふつ、食つた食つた… ご馳走様」

タコさんウインナー、鮭、ほうれん草のお浸し、ミニトマト、ふりかけご飯。

姫也はそれをすべてたいたらげ、楊枝で歯の間の肉片をとっていた。

高校生らしからぬ、非常にオヤジ臭い動作である。

「ふふつ、いい食べっぶりだったぞ姫也。作った甲斐があつたと言ふものだ」

本にドッグイヤーを作りながら、地面に敷かれたブル シートに座つていた北王子昴はふふつ、と小さく笑つた。

彼が食べていた弁当を作つた彼女は彼よりも早く食事を済ませ、読書をしていた。

この高校に通う同じ二年F組の、出席番号27番。

早乙女姫也と同じく保健係で、帰宅部員。

すらっとした長身、モデルのような体型。

でる所はそれなりに出ている、そしてそれを包むセーラー服。

ショートヘアの黒髪に、中性的な顔立ち。

そして、真っ直ぐな大きい瞳。

いつも凜としており裏表がない彼女は同性の方が固定ファンがこの学校には多く、ボーイッシュを通り越してカッコいい、という印象だ。

因みにパンチ力100トンであるが、今回もその事はあまり関係ない。

姫也的にも、関係ないままでいてほしかった。

ジャンプ力、78m。

パンチ力、103t。

キック力、152t。

走力は100mを3秒。

上記のスペックは、仮面ライダー響鬼の能力ではなく、昂のスペックである。

彼女がそのボディースペックを全開にする事態など、そうはない。

あつてほしくない、事態である。

そんな彼女が読んでいる本は、100円レシピの料理本であった。

彼女の座っている御座の周りには、ガーデニングの本や、など、家庭的な内容の本が平積みされている。

「しっかし前より上手になったよなあ昂。黒焦げの卵焼きとか、バラバラに裂けたタコさんウィンナーとか、炊けてない米とか、ないもんなあ」

感慨深げに、去年の彼女の料理を回想する姫也。

彼女が料理や洗濯などの家事を率先して行うようになったのは、去年の中ごろからであった。

「ふふっ、普通の女子なら好感度激落ちな台詞をサラリと言ってくれるな姫也」

当たり前だ、あれは人の食べる食い物じゃなかった。

そして、彼女の家事の実験台はいつも自分であった。

食事だけじゃない、洗濯にも付き合わされて一張羅を色落ちさせられたし、部屋の掃除に付き合わされた時も、花瓶を二つほど割られている。

とにかく、彼女が人が普通に食べられる食事を作ることが出来るようになったのは、僕の尊い犠牲があったからなのだ。

だから一言くらい言っただけいいもんだ、と姫也は思ったが、さすがにそれは言葉に出さなかった。

伊丹傷に対する「ゲルシヨツカー首領」発言を経た彼は「口は災いのもと」という日本語を覚えたらしい。

「感動のあまりに、最初のバージョンの弁当を作ってしまったらどうするんだ」

ムっとした顔を作り、むくれてみせる昴。

普段はクール&ポイイツシュ&かつこいいキャラで通っている彼女が、特に仲のよい人物にのみ見せるその表情は文句なしにかわいいと表現出来るのだが、言っている事が姫也にとってはあまりにバイオレンスであった。

「ほう、昴は僕の寿命をあと数年縮めたいみたいですね。生命保険かけときましようかねえ僕」

「いや、抵抗力をつけているだけだ。良薬、口にレガシイと言っだるっ」

言いません。

とりあえず、ツッコむ気にもなれなかった。

確かに、昴の初期のモザイク弁当を食べて体を壊してからはよほどの物を食べない限り腹を壊さないようになったが、今一度あんなものを食べたなら、抵抗力が出来る前に死んでしまう。

食後にモザイク弁当を思い出しただけで、胸からこみ上げるものがあつたので、姫也は早くあの弁当の事を忘却出来るよう努力した。

「ごちそうさまでした……」

人ごみの中であつたらかき消されてしまいそんな小さな声の主、伊丹傷は二人の元に歩み寄つた。

彼女は二人とは少しだけ距離をおいて、自分で作ってきた小さな弁当を黙々と食べていたのだ。

彼女の頭部は黒い包帯に包まれており、その下は普通的女子高生であつた。普通にセーラー服も身につけている。

「人前で食べるようになったんだな、メシ」
深々とチェアに座つたまま、姫也は伊丹を見上げる。

姫也が見たところ、ここ数日で彼女を包んでいた仮物『黒包帯（仮）』は少しずつであるが、少なくなっているようであつた。

依然は空気を吸うために包帯が少しだけ緩く巻いてあるものの、完全に腫や口、髪などが見えない状態であつたが、今日は少し、本当に少しであるが違つようであつた。

少し、少しであるが、腫の部分に五百円玉サイズの穴があいており、よくよく覗くと、瞳が見えるのだ。

あの事件を経て、伊丹は姫也と昴の二人と共に行動する時間が出来た。

授業の合間や、今のような休み時間、放課後などが、その時間である。

まだ、主に姫也達側から、ではあるが。

「はい、まだ… ちよつと遠くでそっぽ向いてないと駄目なんですけど」

小さな弁当箱を胸に抱え、少しだけ嬉しそうに語る伊丹。

「ありがとうございます」

そして、彼女はあわてて礼を言い、頭を下げた。

姫也は少しだけ、それが水臭いように感じられた。

「いいよ礼なんて、友達じゃん。改めてそついうの、いいって」

手をふるふると振り、めんどくさそうにそっぽを向いて週刊少年ヴアンプで顔を隠す姫也。

因みに雑誌を反対に持っているのは、お約束である。

水臭くもあるが、素直に感謝された恥ずかしさもあり、悪ぶってみせているのだ。

「そつだ、私だって伊丹の友達だ。それに…」

昴は姫也と対照的に、伊丹を真っ直ぐに見つめる。

「姫也に『礼なら体でしてクレクレクリヤリンコ』なんて言われかねないからな、気をつけた方がいい」

ふふつと笑いながら、昴は姫也の方を見つめる。

「かつ、かかか……体ですか!？」

普段以上にどもり、もじもじしながら内またで体をガードする伊丹。多分、包帯の中の素顔は赤面しているであろう。

「なっ!？お前は俺をエロゲの主人公にしたいのか!？しかもなんでクレクレタコラなんだよ!!」

これだけドン引きな台詞を口にする幼馴染も珍しいであろう。

北王子昴、見てくれや普段の言動は確かに気さくでボーイッシュ&カッコいい美少女で通っているが、一皮剥けばこの通り、僕をからかうことが生きがいの、ただのオッサンになる事があるので、対応に困る。

「先ほどの素敵な失言のお返しだ」

ふふん、と得意げに言い、雑誌を読み始める昴。

「そりゃどうも……」

昴にそう言われると、返す言葉がなかった。

最近、言葉の重みについてよく考えるようになった早乙女であった。

「あ、伊丹、気にしなくていいからな」

今後のために、とりあえずフォローはしておく姫也。

ただでさえ、ガチのシスコン、ロリシヨタコン疑惑を学校内の一部の過激派から囁かれているため、これ以上のレッテルが作り上げられるだけは防ぎたいのである。

「あ……は、はい」

伊丹は照れ隠しに少しだけ俯き、自前の赤川次郎の小さな小説で顔を隠す。

文庫本サイズのため、全く隠れてはいないのだが。

(体…か)

早乙女は週刊少年ヴァンプで顔を隠しながら、無意識に伊丹傷の体を見つめていた。

伊丹の顔は相変わらず黒い包帯に包まれているが、その体は制服に包まれた、普通の女子高生である。

以前、見たときにも思ったことであるが、出ている所は、しっかり出ているのである。

足も健康的な脚線美を描いているし、今日は黒いハイソックスを履いていた。

「……いい天気だな、姫也」

昴は立ち上がり、ニコツと笑ったまま、姫也の肩を背後からポン、と叩いた。

「そ、ソウデスネ…あはは」

少し、ひきつった笑顔で答える。

やわらかい指が、メリメリ、と肩に食い込む。

そして、その指よりも柔らかい、彼女の突起が背後から右の頭部分に、ほんの少しだけ接触した。

少しだけ振り向くが、彼女はまだにここにこ笑っていた。

「……確かに、いい天気……ですね」

伊丹は姫也の少し不純な視線も、昴のやきもちにも気づかず二人に同意し、伊丹は呑気に背伸びをして空を見上げた。

彼女だけは、ほんわかした雰囲気だった。

他二人は、。ピンク色なんだか紫色なんだかよく分からないオーラに包まれていた。

「あの… 昴サン、僕に当たってたり、握り潰してたりするんですか？」

「ああ、二つともわざとだ」

天国と地獄の感触を味わえるなんて、幸せな男だなあ、と姫也は思うように勤めた

つづく

伍之斬 赤ノ髪

あまりに唐突な展開であるため、自分自身でも理解するのに少しばかり時間が必要だった。

伊丹と昴と昼休みを一緒に過ごした所までは覚えている、それ以降の記憶がないのだ。

まだ、夢の続きでも見ているのではないか、そんな錯覚すら、したのだが

「ふーがぶががが… (つーか、マジかよ…)」

眠りから覚めた時には既に、僕は全身を尋常ではない量の荒縄で拘束されていた。

口にもタオルが噛まされており、全く喋ることが出来ず、鼻呼吸である。

場所はどこか、これまたわからない。

廃工場みたいな場所である、ベルトコンベアやプレス機みたいなものが大量にあり、僕の高校の体育館くらいの大きさであった。

「フーフ、上首尾だった。我ながら素晴らしい手際だZEE!!」
聞き覚えのない声であった。

「ふががががが (誰だ貴様は!)」

先の通り、僕はタオルで全く喋ることが出来ない。

「オイオイ?何を言っているか全然聞き取れネーゾ!!」

眼前にいる男は、首を傾げ、無数に積み重ねられた赤いレンガに座りながら僕を見下ろしている。

「ふががぶがぶがぶ!! (このタオルのせいだろがコラ!!)」
僕の眼前にいる男。

そいつは、侍だった。

腰まで届くほどに伸びた、緑色の長い髪。

鳥によく似た白い仮面を被り、顔面は口元しか露出していない。
まるでライダーマンである。
しかもなぜか、不適な笑みを漏らしており、気持ち悪い。アゴの形は、ライダーマンと似ているが。
着ているものは、これまた珍味な着物であった。

虹色の和服の肩にはヒラヒラとした飾りがついたドクロの肩あてがついており、首には鎖を三つかけていた。

手には指出しの黒いグローブをはめており、先端が花の花弁のようになつた袴を履いている。

酷い、格好であった。

アニメのコスプレ… ではないことは一目瞭然である、余りに統一感がない。

一生懸命なんか付け過ぎである。

「お、そうか… そういうことKA」

僕が珍味な服装に注意を払っている時間を全てかけて、こいつは僕の言わんとしていることを理解出来たようである。

全く空気の読めない奴だ。

どんな残虐な誘拐犯でも、この縄を一旦は外して、僕に何か言わせるはずだ。

こいつは、そのセオリーにやっと気づいたようである。

「ぶぎが…！がるとごなじ…！べるぎ…！くうが…！（そうだ…！早くとりやがれ…！ばかやろう…！）」

侍は無数に重ねられたブロックの一つを手にとり、僕の背後に向かって投げつけた。

僕の背後に壁があるのだろう、投げつけられたブロックがそこにぶち当たると、廃工場内に明かりがついた。

「こつ暗くては、緊張して言葉も出んよな。悪かった、H A H A H A
A！」

厭味ではなく、本気で言っているようであった。

仮面から覗かせる瞳がマジなのだ。

「！！！」

僕は確信した。

こいつはアホだ。

しかも普通ではない、聖なる泉が枯れ果てるほどに、究極のアホだ。

「むぐががが！！ぎぐばぎが！！！！」（残虐過ぎる単語のため自粛）

！！！」

「ううむ…？」

「もしかして… 君はグロンギー族なのか？まだリントの言葉を話せないのか？さっきからグググググググ…」

全く理解出来ないシチュエーションではあったが、二つ、確かなことがあった。

一つは、こいつは僕によく似ている。

風貌やアホな所が、ではない。

特撮ネタが好きな所だ。

もう一つ、平成仮面ライダー派、ということだけ、理解出来た。

つまり、それだけしか分からなかった。

廃工場の冷たい風が体に染みる。

ああ、早く帰りたい…

「全く、言葉が違うというだけで、ここまで意思疎通が難しくなるとは、困ったものだ！！！」

数分後の事である。

謎の変態侍コスプレ（仮）は、今だに僕の言わんとすることを察せず
にいた。

ここまでバカだと、同情すらしたくなる。

この珍妙な格好も、バカのなせる技なの
だろう。

そんなアホな侍を見物するためであろう、僕の眼前に八工が飛ん
で
きた。

これといって特徴のない普通の、どこにでもいるような八工である。

「あつ！八工だ！キルツ！」

それを無慈悲にも、一刀両断にする変態侍。

ためえよりも生きてる価値のある八工をたたつ切るなよ。

「ふごぎつ！！！」

僕は呻く。

変態侍が振り下ろした刀の先端が、僕の顔面スレスレに接近し、口
を拘束していたタオルを真っ二つに切り裂いた。

「つてめえ！この変態野郎！誰だ貴様！よくも、こんなにしてくれ
やがったな！！目的は何なんだ！？」

ようやく喋れるようになった僕は言いたいことを出来る限り一気に
吐き出す。

「ほう、日本語を話せたのか、よかったゾ。確かに連れ去る前は
話してたしな、普通に」

「くっ…」

もはやツッコむ気力すら萎えていた。

「というか、よくこんなシチュエーションで、そんな質問が出来た
ものだ」

珍妙なる誘拐犯は、頭を抱えながら、僕を可哀相な子を見るような
目で見下ろす。

「この状況で他に何を聞けばいいんだよ!!」

「明日の天気とか」

「とりあえず明日分かればいいよ!」

頭を抱えながら、再び可哀相なものを見るような目で変態侍が僕を見下ろす。

「口の減らない奴だ… 私の名前はレインボーサムライ、最強の間だ」

座ったまま居合切りの構えをして、僕を見下ろすサムライ。

「どうやら、最強らしい（本人曰く）。

「さ、最強？つうか… サムライて」

この男、頭、本当に大丈夫か？

レインボーなのは、貴様の頭ではないか？

この話は勿論、侍が出て来るような昔の日本を舞台にしているし、かといって、こいつの珍妙な格好や言動が超常現象である**仮物の影**^{かりもの}響とも考えられない。

伊丹傷の仮包帯などの「理由ある異端」とは全くベクトルが違っていた。

つまりこいつは、本物なのだ。

本物の、真正正銘のバカで、アホだ。

「くつ、なぜだ… こんなアホな奴に、僕はどうやって負けたと言うんだ?!」

仮物の力を普通に使うことが出来る昴ほどではないにしろ、僕は戦いには慣れていたハズ。

こんな珍味不可思議な奴に、ストレートに負けるハズがないのだが、何より、そのあたりの記憶が僕にはない。

気づいたら、ここにいたのだ。

「ああ、君が午後の授業中にトイレで小用を足してる時、背後から後頭部を殴りつけた」

「最強なんだろう?!なんてえげつない不意打ちを!!」
不覚だった。

くそ、今度からはもう、小をやる時ですら便座に座ってやるう。

「まあ許せないなら、それでもいい。私は君をエサに、最強を自負している彼女を誘い出し、倒す。それが目的だZE」

「彼女… ああ、昂か」

最強という単語で、僕はすぐにこいつの目的が分かった。
昂だ。

北王子昂。

昂は『最強の仮物』と同化した、異端の中の異端だ。

彼女より強い生物を、僕は見たことない。

「やめとけ、死ぬぞ。比喻でも何でもなく」

まあ死ななくても、今度はお前がトイレで小をしてる時に僕が殴りつけてやる!

「あいつは強い弱い区分じゃない、最強なんだ、常に。やめとけ、時間と命の無駄だ」

でも、こんなアホな奴であるが一応は人間だ、とりあえず僕は忠告はしておく。

「悪いが、その忠告は聞けないな、俺には戦う理由がある」

いきなり糞真面目な口調になり、侍は鞘に収まったままの刀を僕の前に突き出した。

「お前ただただバカな誘拐犯じゃないのか?」

「あれは俺がまだ、小さかった頃」

「あ、やっぱいいや。眠いから寝る…」

さつきまで寝ていたというのに、我ながら眠気に弱い。

眠気により、ただでさえ無かった、こいつの過去話への興味が削がれた。

どうでもいいや。

「てめえ何でそんな呑気なんだよ！！てか聞けよ人の話！！」

「あ、電話だけさせてくれね？」

僕は急用を思い出し、レインボーサムライに一応頭を下げて頼んでみる。

「なんなんだ貴様は?!」

それは激しくこっちの台詞だ。

レインボーサムライは渋々、僕の青いバックを廃工場の片隅から取ってきた。

そして、腕の部分を拘束している縄の一部を切り裂いた。

勿論、逃げられない範囲ではあるが。

「お、サンキュ」

その中から取り出された携帯を受けとった僕は、とある人物に連絡をとった。

とある人物とは、今話題となっている北王子昂では、ない。

『あ、姫也クンだ、やつほー。君の甘嚙だよ』

僕が電話をかけた相手、それは甘嚙^{あまがみ}であった。

甘嚙、僕の幼なじみ。

そして、仮物に対しての対策をすぐ考えてくれるアマチュア。

アマチュアというとまた胡散臭い響きはあるが、彼女が関わった事件は、ほぼ九割、解決はしないものの良い妥協点で決着を見ている。ただ、今回電話したのはそんな件ではない。

「おい、甘嚙、お前この前のCD返せよ。借りパクしない奴って分かってはいるけどさ」

伊丹傷のケースで世話になって報酬（豆乳のブリックパック）を渡したときに言おうと思っていたが、言いそびれてしまった用件である。

「ああ、特撮大全集パート2ね、ごめんすぐ返すよ。オシオキはらめえ、だよ？」

『いや、しないし。まあとりあえず返せ、明日までに』

「てめえら何、高校生のたわいもない日常会話やってんだ?!北王子昂を出せ!最強の生命体と俺を戦わせろ!」

いや、僕ら高校生だし。

そして普通の高校生、特撮大全集CD貸し借りしないから。

つうか、耳のいい奴だなこの変態サムライ。

『あ、なら丁度いいや』

「え?」

携帯の向こうの甘噛が、何か気がついたようである。

凄く、嫌な予感がした。

こいつが自分から何かを思い付いたとき、いつも、いつも僕は振り回される。

仮物の事件を解決するときだけである、こいつが真面目に取り組むのは。

あとはただひたすらに翻弄し、奔走し、暴走する、その様から、彼女は周囲の人間から『美少女台風』^{びしょうたいふう}と呼ばれている(酷いネーミングセンスだ...)。

「な... 何がだよ甘噛?何かあったのか?」

恐る恐る、質問する。

美少女台風が封印された鋼鉄の扉を、思い切り開けたような気分である。

『ボク、明日から姫也クンの学校に転校することになったから』

「は?」

僕は、頭が真っ白になった。

比喻ではなく、本当に真っ白であった。

『だから、姫也クンと同じ学校に通えるんだよ。この前の伊丹さん

とも友達になれるかな？それとも恋敵？^{「いがかたき}」

「パードン？」

とりあえず母国語でリアクションすることも忘れ、僕は目を丸くして戦慄する。

『よかつたね姫也くん、幼なじみの彼女と一緒に登校できるよ、じやあね！』

元気よく別れの挨拶をする甘噛。こいつの頭の中はピンク色だろうなあ、と僕は呆然と聞いていた。

そして僕は、携帯をポロリと地面に落としてしまった。

「いや彼女じゃねえしっ！！ふざけんなッ！！つつかマジか！うわー！！！」

凄まじい勢いでジタバタとしながら、。

「なっ！てめえまず刀にビビれよ！とりあえず会話全部まる聞こえだったが、とりあえずちょっとは緊張しろよ！」
うるさい。

仮物事件に巻き込まれてしまうことばかりの僕にとっては、この程度の事は日常茶飯事なのだ。

得に問題はない、何とか自力脱出してやる。

だが、自力脱出の先に待っているのは、甘噛が僕の学園に転校してくる、という回避不可能な、超現実である。

僕にとっては、黒船来航とか、セントラーディー襲来とか、アクシズ落とし並の事件である。

「終わったー！僕の学園生活が終了したー！」

僕は叫ぶ、そして意味もなくジタバタと動く。

サムライ？

知らねえ。

最強の存在と決闘？

もっと知らねえ。

僕にはサムライよりも、最強の存在北王子昴よりも、甘噛が恐ろしいのだ。

「マジ泣きしそうだ?! オイ貴様!」

うるせー!

お前に何が分かる?

とにかく僕は終了したのだ。

サムライよ、お願いだから縄を解いてここに泊めてくれ、外に逃げないから。

もう、駄目だ。

「大丈夫か! ! 姫也! !」

そんな僕の切実な願いを打ち砕くかのように、北王子昴が現れた。廃工場の壁を、思い切り蹴り破って。学園からいきなり消えた僕を助けに。

「来たな最強の生命体! ! 俺が今、ぶっ倒してやるYO! !」

なんでそこで自ら負けフラグ台詞を吐くのだサムライ!

お前セオリーを分かつとけよ!

今のはライバルどころか、雑魚その一の台詞だぞ!

かっこよく居合切りの構えで刀を持ってても、瞬殺臭がプンプンだぞ!

「昴! どうして! ! ここが分かった?」

もうシチュエーション的には感謝感激しなければいけないのだろう。だが、これは昴には本当に失礼千万なのだろうが、僕は逃げ場を失ったように感じた。これで確実に僕は助かる、自力脱出も出来なくはないのだが。

そして、明日は学校に行かねばならぬ。

「ふふっ! ! 匂い、だな」

「そこでガンダムネタかよ! !」

でも多分、本当に昴は僕の匂いで分かったのだと思う。

多分、仮物の力で、嗅覚も常人の数十倍に跳ね上がっているのだ。

「全く、姫也は… 今のはボケではないぞ？ まあいい、それでこそ姫也だ」

昴はやれやれ、といった感じで首を傾げる。

そして紺色のセーラー服に身を包んだ彼女は、僕とこの変態侍の元へ、かつこよく歩いてくる。普段黒くて短い髪が、今は腰まで届くほどに伸びていた。

「私の大好きな 早乙女姫也だ」

そして髪は、赤く、赤く輝き、立ち止まった彼女の背中でゆらゆらと揺れる。

『赤ノ髪』あかのかみ

それが彼女と同化した、最強の仮物だった

続く

仇ノ斬 守り、守られるもの

北王子昴と出会ったのは、雨の日の火葬場であった。

今から四年前、僕が中学一年だった頃のことだ。

その日、僕は兄と最後の別れをしなければならなかった。

彼女、北王子昴を語る上で、どうしても出さねばならない人物、それが僕とは三つ歳が離れた実の兄、早乙女姫花である。

兄は僕と違い、頭脳が神がかり的に良く、容姿も端麗、背も高く、運動神経も抜群、という完璧な人間であった。

常に腰まで届くほどの長髪をしており、背格好はまるで漫画家のクランプが描くような人物のようにすらつとしていた。

何よりも凄いのは、その人間離れたスペックを自覚し、尚且つ自慢せずに努力を怠らず、しかも常に周囲を気遣い戦いを嫌う温和な性格である。

将来の目標は科学者で、科学の力で紛争や貧困を無くすことだった。

まるで夢物語のような目標であるが、それも可能であろう、と思わせるようなカリスマと能力が、兄にはあった。

神様の生まれ変わりか、この荒んだ世界の救世主か何かじゃないかと周囲から言われ、僕の住んでいた街では今世紀最後にして最大の麒麟児と呼ばれていた。

口癖は「早くやらなきゃ」、いつもそう言うては何にでも没頭し、次々と様々な不可能を可能たらしめていた。

しかし、そんな兄は、一人の少女を守るために死んだ。

その日も、雨の日だった。

信号無視で突っ込んできた車に轢かれそうになった少女を突き飛ばし、兄は死んだ。

その少女こそ、北王子昴だったのだ。

北王子昂はあまりの精神的ショックで葬式には参加出来ず、告別式の火葬場で初めて、兄の葬儀に参加したのだ。

僕は最初、親戚ではない北王子昂を見て、見知らぬ少女がなぜこんな火葬場にいるのか不思議に思った。

そして兄が助けた少女が彼女、北王子昂である事実を知り、最初に嫌悪感と怒りをぶつけた。

なぜ、兄が死ななければならなかったのか。

その怒りを、幼かった僕は全て彼女にぶつけてしまった。

彼女に罪など、全くないというのに。

火葬場で、突然つかみ掛かかり押し倒した僕に向かって、彼女は何度も泣いて謝罪した。

僕は父に思い切りぶん殴られ、三日三晩泣いて、ようやく、彼女に理不尽なことをした、と少し反省した。

そして、事件が起こった。

その事件こそ、今の北王子昂との人間関係が築かれるきっかけとなる、僕が初めて遭遇した仮物の事件であった

不覚にも変態侍に捕獲されてしまった僕であったが、捨てる神あれば拾う神もいたようである。

見覚えもない、外界から閉ざされた体育館のような広さの廃工場。

そんな場所に監禁された僕を助けに、北王子昂が颯爽と登場したのだ。

赤く長い髪をなびかせ、紺色のセーラー服に身を包んだ彼女は、僕と、このレインボーサムライの立つ位置から数メートル離れた場所で、しつかりと宣言する。

「私の大好きな　早乙女姫也だ」

口元だけであるが、昴は笑っていた。

「つつ！？」僕は、相変わらず全身を拘束されたまま。言葉を失う。僕は多分、赤面しているであろう。北王子昴は基本、素直クールだ。愛情表現がストレートで、突拍子もなくこういうことを言っっては、僕を驚かせる。

普通に、なんの予告もなく言うんだものなあ（あっても困るが）。

本当に彼女の愛情表現はどストレートだ。

「あ…ありがとよ」

しかし、僕はその愛情表現に対して、これくらいの言葉しか、返すことが出来なかった。

それは僕が昴を嫌っているからではない。

僕は昴の事は好きなのだ、友人としても、そして異性としても。

ただ、僕は昴「も」好きだから、彼女の想いに応えることが、出来ないのだ。

「ふふつ、すまないな姫也…　しかし、どうしたというんだ？そんな縄の十本や二十本、抜けられないような体ではないだろう？」

僕がポケットと突っ立っていると、昴は呆れたように尋ねてきた。

ああ、やはり昴は気づいていたのか。

僕が、本調子ではないことに。

今現在、僕は体中をバカでアホなサムライによって縛られている。だが、普段なら後ろに拘束された手でガラス片などを探したりして、どうにか脱出、あわよくばサムライと戦うことも、出来なくはないのだ。

そう、こういう事件の際、僕が昴に助けてもらったことなど、ほとんどなかったのだ。

だが今日は、自力で脱出出来ないしつかりとした理由があった。

「い方が、本当はいいんだがな……」

「多分皮肉をこめて言われたほめ言葉を、昴はそのまま受け取る。」

「サムライさんよ、あんたは守るものはないのかよ!!!」

「僕も負けじとカツコよくサムライに問いかけるが、いかんせん無数の縄でダンゴムシ状態にされているため、間抜けな構図になっている。」

「ケツ、私の過去話よりも睡眠をとった奴には教えられないが、とりあえず私は私のために戦う、この力は、私による、私だけの、私を守るための力だ!!!」

「そうか……なら安心した。昴、んなワケだから、すまないけど頼むわ。」

「こいつは、昴には……いや、僕にすら勝てない。」

「サムライの言葉を聞き、僕はそう確信した。」

「こいつの力は、自分を守るためだけの力だ。」

「そんなものが、僕達を倒せるわけがないのだ。」

「僕達が、そんなものに敗れるわけがないのだ。なぜなら……」

「ふふつ、ああ!!!北王子昴、まいりゅ!!!」

昴は頷く、と、同時にサムライに向かって廃工場の中を一気に走り出す。

散乱する新聞紙やネジなどの小物を跳ね飛ばしながら、まるでジャガーのようにその体は加速し、一気にサムライとの距離を詰めた。対するレインボーサムライはさすがに侍らしく、居合い斬りの構えで迎撃体勢をとる。

完全に余談であるが、居合いの構えを見ると、世代的に僕は『るるる剣』を思い出す。

「噛んでんじやねえぞ！！やれるもんなら、やって見る！！」

サムライは居合いと同時に、刀を手から離す。

刀は鈍い光を放ちながら、サムライに肉迫しようとした昴へと飛ぶ。
「刀を飛ばした！？」

昴は叫ぶ、と同時に完全に脳天を捉えて飛来していた刀を避ける。

「ハハハツ！見たか！？聞いたか！？驚いたか！？レインボーサムライの最終奥義抜刀の型、驚異高速抜刀投げ！！」

刀を避けたことにより少し姿勢を崩した昴の顔面めがけて、鉄拳を叩き込むサムライ。

バカな奴だ。

そんなフェイントをしたからといって、徒手空拳で昴に勝てるわけがない。

なぜなら彼女の最も得意とする戦闘スタイルが徒手空拳だからだ。

「この程度！！」

サムライの拳を額で受け止め、拳を握り締める昴。

この拳がヒットすれば、サムライはバイキンマンよろしく空の彼方まで吹き飛ばされる。

終わった、完全に

「ハハツ！と見せ掛けて、これが本当の最終必殺ツ！！」

と思った瞬間、信じられないことが起こった。

レインボーサムライの体が宙に浮き、首が前方にへし折れたのである。

そして彼の全身は骨が軋むかのような耳障りな音をたてて、腕と足が全て同じ方向へと折れ曲がるという、奇怪な変形を始めた。

「なっ！？…なんと?!」

流石の昴もこれには驚いていた。

「マジかよ……」

僕も、思わず驚きの声を漏らす。

サムライは、人体の構造を完璧に無視して変形を果たした。

首が親指に。

左手は人差し指に。

左足は中指に。

右足は薬指に。

右手は小指に。

そして、背中^①は手の甲に、胸から腰までが手の平へと、完璧に形を変えた。

「私による、私だけの、私を守るための力、名づけて『完全勝利の握手』^②！つかまえたぜ……北王子昴さんY O O!!」

トランスフォーマーよろしく巨大な掌（しかも左手）へと形を変えたレインボーサムライは、驚く昴を瞬時に捕縛した。

「仮物の力か?!」

一瞬の油断を突かれ、全身を巨大な拳に握りしめられた昴が叫ぶ。

そして拳は明らかに変形前のレインボーサムライの二倍近く大きくなっており、昴の全身はすっぽりと隠されてしまう

「砕け散れっ!!北王子昴ッ!!」

巨大な掌が高速回転しながら天井に急上昇し、その勢いそのまま天井に衝突する。

ぐらぐらと地響きが起こり、廃工場内の埃や木材が宙を舞う。

「ああ、駄目だ」

「何ヒロインが死ぬ寸前なのに諦めてんだてめえ！？って私の台詞ではないがな！！」

天井に突き刺さったまま、僕に指摘するサムライ。

人間が変形した拳に説教された人類は、多分この僕が初めてであるう（アニメ作品であつても）。

どうやらサムライは、今の言葉がとてつもなく冷たい人間が吐いた捨て台詞に聞こえたのだろう。

つつか本当に耳いいな、このサムライ、戦闘中だろうが。

「いや、お前が駄目なわけで」

そう、僕は昴を冷たく突き放すつもりで言ったわけではない。

彼女は、必ず勝利する。

なぜなら彼女は、北王子昴だから。

もし、仮に…

仮定の話だが最強である彼女よりも強い存在が現れたら、僕は彼女と共に戦って、思い切り足掻いてから死んでやる。

まあ、そんな事態などまづない、と思うが。

「なにッ？！どこがだよお　　ッ！！」

巨大な拳は回転しながら、重力に任せて一気に落下する。

凄まじい速さではあつた。

これを喰らったら、確かに巨大な掌による圧力に落下の衝撃が加わり、人体はバラバラに吹き飛んでしまうであろう。

普通の、人体であれば。

「スパイラルサムライバスター！！」

ただ、必殺技の名前とか、叫んでも仕方ないのだサムライ。

なぜなら、お前が今、技をかけた相手は、人体の範疇を大きく逸脱した力をもった少女、北王子昴だから。

巨大な掌は昂を握りしめたまま、廃工場の地面に落下する。

その衝撃は凄まじく、地響きが工場内を激しく揺らした。

「うわつと!!」

僕はその振動で足を滑らせ、よろけた。

と同時に、衝撃波により天井で割れた照明のガラス片が落下と同時に背後の縄を切り裂く。

それにより、縄が解け始め、僕はなんとか拘束から解放された。

なんかマンガみたいで間抜けな感じがするが、まあ、いいや。

「H A H A H A!! 私のこと 勝ちだな!!」

変形を解除し、普通の人間の姿へと戻ったレインボーサムライは右腕を振り上げ、勝利ポーズみたいなのを決めている。

いや、普通の人間の姿じゃなかった、サムライは変人の変態であり、虹色の着物を着て仮面をかぶったコスプレ男であった。

そして、そんなサムライの背後には

「すまんな、諦めてくれ」

無傷の北王子が、立っていた。

呼吸ひとつ乱さず、かすり傷ひとつ負わず、まっすぐな瞳に闘志を

映し、サムライを見つめていた。

「なにっ!?!」

「レゾナンスフロントム!!」

昂はまるでジャンプの漫画のように自分で考えた必殺技名を叫んで跳躍する。

そしてサムライの首に両足をかけて後ろから肩に乗り移った。

「か… 関節技だど?! ぐぎ絞まる絞まるG a a!!」

肩車のような体勢のまま、サムライの両腕を自らの両腕で握りしめて拘束し、両足に力を入れ、太股で首を絞める。

圧倒的な、そして化け物すら凌駕するほどの太股の筋肉により、サ

ムライの首が圧迫されていく。

必不殺技^{ひつふせつわざ}、レゾナンスファントム。

必殺技は必ず殺すために存在するが、彼女はどんな凶悪な輩であろうと必ず不殺を貫き通す、昴の技はそのためにあるため、必不殺技と呼んでいる。

レゾナンスファントムという中二病丸出しの恥ずかしいネーミングセンス全壊の必不殺技は、相手の腕関節の破壊、首を絞めることにより敵の戦闘力を奪う、彼女が得意とする間接技^{サブリミション}である。

と、言ってもキン肉マンを読んでいた彼女が閃いた我流の技ではあるが。

「ぐうっ？！私は諦めねえ！次は 必ずッ勝つゾoooooooo!!」

首を絞められているというのに、サムライは叫び声をあげる。

そして次の瞬間には気を失い、膝からがっくりと崩れ落ちた

「全く、まだ諦めてくれないとは… 困ったもんだな、姫也」

サムライの体から離れた昴は、セーラー服についた埃を払いながら、やれやれと肩をすくめる。

そして、赤く長い髪は短く黒いものへと変化し始め、昴は元の姿へと戻っていく

「バカは死ななきゃ治らない、ってか」

僕は、倒れたままのサムライを見下ろしながら、呟いた。

昴の技の衝撃でクレーターが出来た地面に大の字で仰向けになりピクピク動いているレインボーサムライの姿は、どこか哀愁さえ感じさせている

「なあサムライ、だけど人間… 一回しか、死ねないんだぜ」

無意識の内に、考えを口に出していた。

そっくだよ、サムライ。

命は、大切にしろよ。

どんなに怒っても。どんなに泣いても。

どんなに後悔しても。

どんなに、生きている奴が願っても、死んだら、生き返れないんだからよ。

そしてお前は自分だけのために戦ううちは、何度戦っても、昴や僕には勝てないんだ。

自分を守るためだけに戦う奴の力など、たかが知れている。

お前のびっくりドリドツキリ変形の仮物は、自分を守るものの限界なんだと、僕は思う。

だが昴の「赤ノ髪」は、そんなちっぽけな力とは、ベクトルが違うのだ

廃工場の外は、見慣れない街だった。

とりあえず隣町ですらない、川沿いに本当に見たことのないビルや工場が並ぶ、どこか淋しげな雰囲気のところだった。

昴はよく自分達の街より外の、こんなわけのわからん所に監禁された僕を見つけてくれたな、しかも匂いで。

警察犬もびっくりだぞ、本当に。

「ふー、いい空気だぜ」

見知らぬ風景を見ないよう夜空を見上げて、僕はここから歩いて家まで帰らねばならない事実から目を逸らしたかった。

あー、でも星が綺麗だ。

春だというのに、少し寒いのがいただけないが。

「っつかしあの変態サムライ、昴があえて超必殺技をノーガードで喰らって無傷な所を見せて諦めがつくようにしたのに、懲りねえよな」

歩きだした僕達は、まだレインボーサムライの話をしていた。

それほどまでに、僕達にとって、彼はインパクトが強い相手だったのだ、物理的に強いかどうかは別として。

「本当だな、しかし、あの変形にはびっくりしたな。まるでマジンガーZ（真マジンガー版）だ」

ふふっ、と、いつもの特徴的な笑い方で笑い、ロケットパンチの構えをしてみせる昴。

「いや、トランスフォーマーだろあれは」

「そういえば、あんな変形する奴もいたな… 確かギガトロンかガールバトロンとか言ったか？というか、また、姫也が狙われないか心配だな…」

昴が心配そうな表情で僕を見つめるが、僕は首を横に振る。

「大丈夫だって、もう僕に隙はない」

そう、もう二度とこんなアホサムライに不意打ちなどされるつもりはない。

絶対に個室トイレですから、もう大丈夫だ。

絶対にもう、立って小はしないぞ。

今回のお話は、僕のそんな決意表明で終わり。

仇ノ斬 守り、守られるもの（後書き）

キャラクター紹介

【レインボーサムライ】

腰まで届くほどに伸びた緑色の長い髪、
烏からすによく似た白い仮面を被り、顔面は口元しか露出していない。
いつも不適な笑みを漏らしている自信家。

頭の前からつま先まで変な格好で、虹色の和服の肩にはヒラヒラとした飾りがついたドクロの肩あてがついており、首には鎖を三つかけている。

手には指出しの黒いグローブをはめており、先端が花の花弁のようになつた袴を履いており、酷くダサイ印象を周囲に与える。

仮物の名は『完全勝利の握手』パーフェクトビースティックハンド、名付け親が『甘噛』ではないため、『黒包帯』や『赤ノ髪』のように色の名前が入っていない。

刀を飛ばすフェイントにより敵に肉迫し、巨大な拳に変形出来る仮物の能力を使い捕縛。飛翔してそのまま高速回転しながら自由落下し、その衝撃で敵を粉碎する『スパイラルサムライバスター』が必殺奥義。

なぜか、主人公達より紹介文が長い。

七ノ壱 甘嚙祈理（あまがみ・いのり）（前書き）

奇っ怪な夢を見ていた。

「みんな！抱きしめて！銀河の、果てまで！！」

「抱きしめねーよ！！」

甘嚙が、巨人達が集う武道館で、ライブをしていた。

恐ろし過ぎる夢のため、これくらいしか、僕は覚えてられなかった。

夢を忘れられるからこそ、人間は今日を生きることが出来る、のかもしれない

七ノ瀬 甘嚙祈理（あまがみ・いのり）

彼女が、『甘嚙』が、甘嚙祈理あまがみ・いのりが僕の学校に転校してくる。

そんな現実が待ち受けているにも関わらず、僕の体は睡眠を欲し、そして泥のように眠ってしまった。

僕は、酷く疲労していたのだ。

変なサムライに取っ捕まり、助かったのはいいものの、終電に乗り家に帰ってきた頃には日付が変わっていたので、すぐにベッドに入り、僕は眠った。

そして、もう朝が来てしまったのだ。

ベッドから出たくなかった。

いつもは広いと思っていた僕の部屋が、狭く感じた。

あ、7：20分、まだ余裕があるな…

「姫也クン あっさだよ」

灰色の布団と毛布を引っぺがされた、寒い。

そして本編初登場の マークを使うほどに、その少女は機嫌が良さそうに僕の耳元で囁いた。

しかも、僕の死角から、接近してきたのだ、全く見えなかった。

生暖かい吐息が、僕の耳を優しく刺激する。

「あーまだ眠いから、あと5分…」

そうだ、睡眠は大切だ自分。

寝よう、全て忘れて。

甘嚙の昨日の電話は、きつと僕の聞き間違いなのだ。

甘嚙は転校ではなく、天候と言ったのだ、ウエザーだ。
奴はきつと気象予報士になるつもりなのだ、ヨシズミの後釜を狙っ
ているのだ、間違いない。

「もぉーテンプレートな台詞だなあ、幼なじみが起こして来てあげ
てるのに、お寝坊さんだなあ」

全力で現実逃避をしている僕の頭皮を撫で、甘嚙祈理はクスクスと
笑う。

ああかわいいなあくそ！とりあえず帰れ！

「うつせえよ甘嚙……」

そうだ、甘嚙、黙りっしやい。

「……」

その名前を口にして、僕は気づいた。

あ、甘嚙……だと？

「……え？」

僕は今、気づいた。

甘嚙祈理が、僕の部屋にいる

「ひいいやあぁー!!」

僕は布団から飛び起きて、思わず絶叫していた。

生まれた瞬間くらいにしか、このレベルの音量を口から出したこと
はないだろう、そんな感じの大声で、僕は叫んでいた。

僕の目の前にいる少女こそ、『甘嚙』であった。

セミロングの栗色に近い黒い髪、前髪は右側にピンで留めてある。

で、二重瞼の瞳に、アンニュイな表情の、幼い感じを残した丸い輪
郭。

そして、僕より拳一つぶん小さい体をしている、肉つきなどは、普通だ。

「うわっ… 失礼だなあ姫也くん、ボクは熊か何かなの？」

いや、お前より熊に遭遇した方がマシですサーセン。

と言いたかったが、止めておいた。

口は災いの元である。

もつとも、災いは既に現在進行形で起きているのだが

「いえね、感動のあまりに、思わず叫んじゃった」

「感電したって、そんな声は出ないと思うけど？」

「いやあー朝から飛ばしますね甘噛サン、というか二、三、質問があるんですが、いいですか？」

「いいよ 姫也くんの質問になら、バストのサイズだろうが、身につけてるものの色や形だろうが、乙女の恋するハートの中身だろうが、何でも教えてあげるね」

いや、知りたくねえー！

とくに二番は本当に勘弁してくれ！

「えーと、まず一つ、なんでここにいる？」

時計の針は、既に午前7時30分を指していた。

そう、この時間、僕の家には誰もいないハズだ。

父は朝早く仕事に。

義理の母は夜のクラブの仕事が、今終わるくらいの時間である。

義理の妹は… 今、この時間はサナトリウムのキッチンで、自分で作った食事をとっているであろう。

そして、甘噛の家は隣町だ、僕と同じ学校に転校になったのだとしても、それはこの家にいる理由にはならない。

どこか学校に近い家に引っ越ししたハズだ。

そう、設定的に、ここに甘噛祈理がいるわけがないのだ。

「えー姫也くん、大好きなおトコノコを起こしに来るのは、幼なじみの特権だし、義務じゃない、分かってないなあー」

ぷくつと頬を膨らませ、可愛くスネてみせる甘嚙。
そんな義務がいつ出来た？

政権交代の弊害か？

「今の時代バリアフリーだし、譲り合いの精神は凄まじく大事だ。
僕はお年寄りに席を譲らない若者が大嫌いだし、いざという時に他人に譲れるように、僕は優先席に優先的に座っている。千歩譲ってその理由で納得するでしょう」

仕方ない、甘嚙の説明で理解し、納得するしかなかった。
それしか、僕に選択肢はないのだから。

甘嚙は嬉しそうに自分の髪に触りながら、コックリと頷く。

「うんうん 妥協と譲り合いが大事だよ、姫也くん 譲り合い宇宙だよ というか、台詞長いね」
よく気づいたな、舌嚙みそうだった。

「で、もう一つの質問だ。なぜ 裸エプロンなんだ!!」

そう、甘嚙祈理は裸エプロンであった。

いや、違う？

… よく見たら何か青いものを肌に着ている、なんだあれは。

僕はハッキリと覚醒した瞳をゴシゴシと擦り、恐る恐るピントを合わせてみる。

まさか… まさか!!

「ぎーんねんでした 姫也クンのエッチ 裸じゃなくて、スク水エプロンだよ」

きゃははは、と無邪気に笑いながら僕の部屋でクルクルとターンして見せる甘嚙。

そして、部屋の中央に位置するテーブルの上に置いてあった、二つの皿を手にした。

皿の中身は、何とも美味しそうなカレーであった。

「あと、これはボクが作った朝食　カレーだよ」

「それは感謝感激なのだが、とりあえず服を着て下さい」

甘嚙はちえっ、と言いながら、脱ぎ捨てられていた紺色のセーラー服を身につけた。

確かに甘嚙の料理は美味い、家庭の味だ。

殺人的な弁当しか作れなかった北王子昂に料理を教え、食べれる料理を作れるように助力したのも彼女なのだ。

僕はベッドから立ち上がり、やれやれ、と肩をすくめながらテーブルの前に座った

「それより姫也クン、ボクも一つ質問いい？」

なんだよもう、僕はカレー食うのだ。

腹が、減っているのだよ。

「へいへい、何でもどうぞ。エロ本の隠し場所から、夜のオカズの本の隠し場所、更にはいかかわしい本の隠し場所まで、何でも教えてやるわ、こんちクシヨ」

僕は投げやりに答える。

高校の授業で、野球部員が仕切って行われる野球の試合の前にウォーミングアップする普通の生徒くらいに、やる気のない言葉のキャ

ツチボールであった。

ほぼ暴投である。

「それ、全部エロ本じゃない……」
男子ですから。

「で、何だよ？」

そつだ、何かあるというのか甘噛よ。

「服、着ないの？」

服？

衣類？

「……？」

僕は自分の姿を見てみた。

ダビデ像よろしく、全裸であった。

上も、下も。

「きゃああああッ?!」

そついえば、僕は昨日、疲れまくって、帰ってから着替えの途中で寝てしまったような気がする。

あ、なら、朝食食ってシャワー浴びないとか。

「つつか、見てんじゃねえよ?!」

「あはは、ごめん。あまりに堂々と裸だったから……ほら、カレー食べて落ち着いて」

放り出されたトランクと学ランを裸の上に着て、とりあえず僕はカレーを食べ始めた。

「つたく…… めんどくせっ」

眼前に甘噛がいるが、もう恥じらいなどないぜ。

「もう、姫也クンったら……昔から変わらないなあ」

カレーをぱくぱくと食べながら、やれやれといった表情の甘噛が笑う。

朝から調子が狂いまくりだ。
つたく、何なんだこいつは…

友人である北王子昴も「僕をからかう事が生き甲斐」と公言するほどのお騒がせな人物であるが（本人は静かなのに）、この甘噛という少女は、その比ではない。

以前の説明の通り、彼女は存在そのもの、その幼なじみ美少女という皮を被りながらも、ややエキセントリックで突拍子もない言動から「美少女台風」と呼ばれている。

美少女の台風である。

つまり周囲の人間を根こそぎ巻き込み、そして、去っていくのだ。アポロガイストさんですら凌駕するであろう、ハタ迷惑な存在なのである。

この少女がその力を正しく駆使し活躍するのは、仮物事件解決のため『だけ』である。

それだけは、僕も認める。

「伊丹傷」の「黒包帯」ケースもそうであるが、彼女がいないと、まず事件は一つとして解決しないであろう。

セミプロというスタイルではあるが、しっかりと解決出来る確率が七割強なので、既にプロを名乗ってもいいんじゃないか、と僕は思うのだが、彼女は「いや、プロに失礼だからいいや」と否定する。

しかも、報酬は豆乳のブリックパッカー一つ（価格は驚きの3パック230円!!!）、という破格のプライスで、事件解決に奔走してくれるのだ。

台風ではあるが、ビジュアルも中々のもの、いや、本当は美少女と

呼んでも全く問題はないくらい、綺麗で、かわいいのだ。

中身も中身で、典型的でテンプレートな世話焼き幼なじみキャラに、好きな幼なじみの、オトコノコの好みに合わせて柔軟に対応してくれる従順さと、ちょっと相手をからかう余裕をプラスして進化した、最強に近い幼なじみキャラなのだ。

転校初日に僕的にクリティカルヒットなスク水エプロンでカレー作って起こしに来るなんて離れ技を使いこなしている時点で、その最強さは分かると思うが。

ファッションセンスも良く、フリルいっぱい服なんか着た日には雑誌の読者モデル顔負けである。

本人に言ったら調子に乗るから、絶対に言いたくはないのだが。

今、サナトリウムにいる病強^{ヒキヤク}な僕の義妹のスペックも完璧ではあるが、彼女もそれに匹敵するほどの高性能美少女であった。

MSに例えるならば妹はダブルオーライザー。

甘嚙はゴッドガンダム。

因みに北王子はカイラスギリ。

伊丹はエヴァ零号機である。

ここまで甘嚙祈理について話すと、一つだけ、本当に一つだけ疑問に残ることがあるだろう。

そう、僕の甘嚙に対しての対応だ。

幼なじみの世話焼きキャラに対するものではない、とお気づきだろうか？

あまりにつれない態度で、つつけんどんに返している。

それ以前に、出会い頭に叫び声をあげるなんて、なんなんだ、と思う奴もいるだろう。

だが、それだけの理由が、僕にはあつた。
多分八割の人は、理由を聞いて納得してくれるだろう。
彼女は、甘嚙祈理は普通の女の子ではないのだ。
かと言つて、普通ではない女の子でもなかつた。
僕の幼なじみである彼女、甘嚙祈理は

普通ではない『男』だつた

続く。

七ノ噺 甘嚙祈理（あまがみ・いのり）（後書き）

ついに本作最強のダークホース、幼なじみ、甘嚙祈理の登場です。彼女は動かし易い、行動原理がしっかりしてるし、絡ませ易い。かなりこの七ノ噺はハイスピードで書き上げられました。

甘嚙のキャラ紹介の必要はなさげなので、今回はここまで。

氷ノ噺 灰ノ瞳（前書き）

『仮物』とは、若者の周辺で起こる不可思議な現象全般のことを指す、ボクが作った造語です。

他の場所で、どのような呼ばれ方をしているかは存じませんが、ボクの周辺の人達はその呼び名を使ってくれています。

ボク達は、常に不安感を持って生きてる不安定な生き物だから、それが『仮』の形を得て『物』質として、出現するから、ボクは『仮物』と名付けました。

甘嚙が後世のために作っているメモの一部より抜粋

氷ノ囁 灰ノ瞳

彼女が、『甘嚙』が、甘嚙あまがみ、いのり祈理が僕の学校に転校してきた。

そんな現実が過ぎ去り、昼休みが訪れていた。

紺色のブレザー（前に通っていた高校の女子の制服）に身を包んだ甘嚙は、自己紹介で自分が『男』であることを告白。

女子からも、一部の男子からも人気であった。

そこは流石だと、僕は思った。

彼女は北王子昴以上に、人に好かれる要素がある。

小さな思いやりも忘れないし、他人より優れていても鼻にかけないし、ジョークも通じる。

だから彼女は、すぐクラスの皆に、仲良く、までではないものの、好意的に受け入れられていた。

伊丹や昴と共に屋上で僕と違い、今頃、クラスの皆とランチタイムをとっているだろう。

「いやあくみんなに気づかれないように屋上まで来るのって、大変だね傷ちゃん？」

「ええ？まあ… はい、私はそんなこと、ないんですけど」

そう、甘嚙のヤツは、みんなと一緒にいるのだ。

今、僕の目の前でブルーシートに座り、伊丹と話しているのは、多分幻だ、そうに違いない。

今現在、僕ははかなり疲労している。

昨日は昨日で監禁されていたし、今日は今日で甘嚙に振り回されっぱなしだし。

幻覚や幻聴に惑わされても、仕方がないのだ。

それか、眼前の少女は甘嚙のそっくりさんだ。

「しかし甘嚙、本当に君の料理は美味しそうだな……」
北王子昴は、甘嚙のそっくりさんがつついている弁当を見つめて咳く。

昨日あれだけ戦っても、仮物『赤ノ髪』の副次的な効果で、まったく疲労していない様子である。

普通に人間である僕は朝、ドタバタしてしまい、寝癖つけたままで登校してしまったというのに、彼女は普段通りの紺色のブレザーに身を包み、ナチュラルなメイクをして、短く切りそろえられた前髪にはバツテンマークの髪留めがついている。

「そんなあ、昴ちゃんも、すぐこれくらい作れるようになるって」
ああ、やっぱりこいつは甘嚙祈理であった。

褒められても調子に乗らず、他人をしつかり褒める。

普通の人間の技術レベルの弁当を作っているごくごく普通の人間なら、そういった対応も可能であろう。

だが、彼女が今日作ってきた弁当は、そんじょそこの女子が料理本かじって、冷凍食品もミックスして作り上げた弁当とは、わけが違うのだ。

そんな弁当が作れる甘嚙レベルで家事が万能な人間などそうはいないだろうし、いたとしても、まず今の甘嚙のような台詞は出てこないであろう。

絶対に自身満々に、自画自賛してしまうだろう。

だから彼女は、正真正銘の、見紛うことなき、甘嚙祈理である。

しかし、よく、クラスメイトの目を盗んで、この屋上に来れたものだ。

「ああ……めんどくせえ」

僕は新調したハンモックに寝そべり、だるそうに今週の週刊少年ヴァンプで顔を覆った。

因みに、僕が使用しているピンク色のハンモックは手すりと手すりに括り付けてあり、かなり安定性があるのだ。

まあ、なきや困るのだが。

「あつ、なんかやる気のない男子発見」

なんか、突っ掛かってきたし！

甘噛はヴァンプを取り上げると、僕の顔を覗き込む。

幼馴染がセミロングの栗色に近い黒い髪を掻き分けつつ、アンニユイな表情で微笑んでいる。

その構図はもはやギャルゲーの世界なのだが、重ね重ね言うが彼女は男だ。

「若くて健康的な男子がヤル気になったら、女の子三人に囲まれた時点でどうにかなっちゃうって」

僕は必死で反論する。

「というか、僕のヴァンプを返せ。今日買った最新号だぞ。」

「うわっ… セクハラ親父発言だ、伊丹さん聞いた？」

甘噛は眉をひそめて二、三步後ずさりし、ブルーシートに座ってPSPをしている伊丹に向かって問いかける。

「は、はい…」

伊丹は、僕達の話をおもひに聞いていなかったらしく、空返事だ。

「誤解ではないから、別に弁解する気も起きん」

僕はふてくされたようにそっぽを向く。

もう好きにしてくれ、甘噛にからまれたらもう、負けを認めてやり過ぎすしかない。

それがベターな方法なのだ。

「あの、姫也さん… それは、それとして、質問があるんですけど」「な、なんスか？」

僕はハンモックにもたれかかったまま、ブリックパックの豆乳青汁ココアをちびちびと飲みつつ（そうしないと、すぐ終わるサイズなんだよなあ）振り返る。

伊丹はPSPを傍らに置き、ブルーシートの上で体育座りをしてい

た。

そして、ハンモックに寝そべる僕を見つめる。心なしか、昨日より顔の包帯の厚みがなくなり、比較的スリムになっ

てきているような気がするな。
「 姫也さんは、甘嚙さんのアプローチも、北王子さんのアピールも、全部スルーするのは… 妹さんが一番好きだからって、聞いたんですが… 」

伊丹は首を傾げながら、真面目な声で問いかける。
包帯の隙間から覗くことが出来るその瞳は、心なしか懐疑的に見えた。

「ブっ?! ち、違… 誰から聞いた?! 」

伊丹相手に少し語気が強くなってしまっている。

「え、あの…」
そんな僕に勢いに少し驚いた様子の伊丹は、恐る恐る、甘嚙を指さした。

「お、お前なあ…」

甘嚙は、少し申し訳なさそうな顔で笑った。

「えへへ、だつて姫也くん、あまりに釣れないんだもん」

「僕はシスコンじゃない! ついでに言うとしヨタコンでもない! 」
僕は甘嚙を指指して、感情のままに叫ぶ。
そつだそつだ! と北王子が伊丹の横でうれしそつに頷く。
なんでお前がうれしそつなんだ。

「お前が僕にべつたりだとシヨタコン呼ばわりされちまうんだ、ただでさえ一部からシスコンで変態扱いされてるのに… ホント、何なんだ… 僕は男には興味ないッ! 」

言ってやった。

「うっ… ひどいよ、姫也クン… あんまりだよお」

いつもの元気な甘嚙の表情が一変、まるで太陽が雲に隠れてしまったかのように、曇りだす。

そして彼女は両手で顔を隠すと、俯いて肩を震わせた。

「え…」

僕はそんな甘嚙の表情に驚き、ハンモックから身を乗り出す。

え？泣かせてしまった？

甘嚙祈理を…？

「姫也さん… 謝って下さい」

啞然としてしまった僕に声をかけたのは、伊丹だった。

「え？」

「謝るべきだな、言いすぎだ」

「ボク、迷惑なのかなあ… ひぐっ、ひぐっ… 姫也クンにとって邪魔なのかなあ」

「悪かった… お前がいなけりゃ、僕や昴、伊丹は、どうにもならなかった…」

昴も伊丹も、これには深く頷いた。

確かに、甘嚙がいなければ、僕達はどうにもならなかった。

甘嚙がいなかったら、『赤ノ髪事件』も、きつと大惨事に終わり、僕と昴の今の関係は無くなっている。

そして、『黒包帯事件』も、どうすればいいかわからないまま、途方にくれていたであろう。

そう、僕は、いや、僕達は甘嚙が必要だし、これ以上なく感謝しているのだ。

だが、まだ甘噛は泣き止まない。

「ひぐつ… だってそれは仮物事件解決のセミプロとしての『甘噛』でしょう… 姫也くんは仮物のアドバイザーなら、巨大な脳みそでも、中年のオツチャンでも、なんでもいいんだ！…うわぁーん！！」
ぐつ！！

痛い所を突かれた。

確かに僕が泣かせたのは、彼女の乙女心を踏みにじったからである。そのことと、仮物は、今は別問題だ。

「あーもう！わぁーったよ！！僕は甘噛の好意が嬉しいです！！かわいい祈理が朝食、昼食作ってくれて、男として無上の喜びを感じています！！ただ、恥ずかしいから言えなかつたけど、祈理は女子としては最高レベルのスペック持ちだと思います！！そんな祈理が幼馴染で、僕は本当に幸せです！！」

僕は、普段なら絶対、口が裂けても言わないことを、叫ぶ。

少し投げやり気味であるが、嘘ではない、いつも僕が思っていて、言えないことである。

致し方ない、いつも明るくニコニコしている彼女が泣いていれば、僕だって口を裂いて、これくらい本音をぶちまけないといけないのだ。

僕はそれが出来ないほどの男ではない、はずである。

だが、まだ甘噛は泣いていた。

「って、これやるから勘弁してくれ、祈理！！」

名前で呼んで、泣き止まない困った少女にスペシャルアイテムを差し出す。

この一枚は、僕が滅多に使用しない、最大最後のレアアイテムである。

「まさか、これはッ… これはッ!?」

甘嚙は僕の手の中にあるそれを受け取ると、にぱっと笑い、その場に立ち上がった。

「なっ、泣き止んだ!?!」

太陽に翳し、その紙に書かれた汚い日本語を、甘嚙は確認している。そんなにまじまじとなくなっても、分かるだろうに、その紙は…

「わーい、これは伝説の、『二十枚集めると、姫也クンと一日デートが出来る券』だー!!」

ぴょんぴょんと跳ね回り、甘嚙はその券をひらひらと振り回す。

そんなに、その紙はお前にとって大事なのか。

僕は少し、複雑な気持ちになった。

僕はその券を出す時はいつも苦し紛れにお前にあげているのに、そんなに喜ばれるとは…

「つつか嘘泣きだったろ、このヤロ、返せー!!」

「きゃっほーい!!」

僕は元気に跳ね回る甘嚙を見て、ようやく、先ほどまでの弱弱しい彼女が演技であることに気づいた。

僕はさっきまでの自分の台詞を思い返し、顔から火が出そうになった。

「諮ったな、甘嚙!!」

僕はガルマ・ザビ風に叫ぶ。

「測ったさ!! 自分の女子としての演技力と、姫也クンの度量をね!!」

甘嚙は甘嚙でグレンラガン風に答える。

こいつ!

マジで逃げ足だけは速い!!

いいや逃がしてなるものか!!

後ろからその洗濯板みたいな胸を揉みしだいてくれる!!

スカートめくつてくれる！！

つて！！僕は変態か！！

「私も…欲しい」

「私は…別にいいです」

昴は、甘噛が天高く掲げているその券をじっと見つめて呟く。

伊丹は、あんまり興味がなさそうである。

いや、この券は君達には発行してない。

『二十枚集めると、姫也クンと一日デートが出来る券』

これは、僕が本当に金欠でブリックパックすら買えない時と、仮物の事件が重なった場合にのみ発行する、甘噛専用の券なのだ。

この券でも、甘噛は事件解決のために力を貸してくれる。

最近ではめつきり使用しなくなったが、まあ、甘噛もこの券を20枚も集めることはないだろうから、大丈夫だ。

甘噛と一日デートしたら、どんな方法で攻めてくるかわかりやしない。

想像しただけで…いや、想像出来なかった。

「私はあの券、必要ないですけど、でも、一つだけ分かったことが…」

伊丹は追いかけてこ（僕はマジで追いかけているが）をしている僕達をよそに、昴に話しかけた。

「ん？」

昴は追いかけてこをしている僕達を微笑ましそうな瞳で見つめていた。

「姫也君って素直じゃないけど、かなり、優しいんですね」

素直じゃないは、余計だ伊丹。

というか、今分かったのか。

「ああ、だから、好きなんだよ」

昴は昴で、頬を赤くしながら、冷静に呟いていた。
でも、しっかり、僕にも伝わるくらいの声量で。

ああもう!!こいつらは一体、何なんだ?!

素直クールと素直ヒートと静かめだけと言葉は選ばない女子軍団だ
!!

つづく!!

死ノ囁 灰ノ瞳（後書き）

第一回ウラけもの

「どーも、本作の主人公、早乙女姫也です」

「はいはい！どうも！みんなのアイドル、甘嚙です！」

「しっかし甘嚙さん、このコーナーはなんなんスか？僕は帰ってスペクトルマンのDVD見たいんですけど」

「このコーナーは本編の解説とか、最近のボク達のマイブーム、とか色々やっちゃうってコーナーですっ」

「そういうのは、本編でしっかり描写をだな…」

「まあまあ！それはまあ作者の限界、と言うことで」

「… なんか納得出来ないけど、納得しないと話が進まないのだから、得したことにしよう」

「うーん… じゃあ姫也君から、今回の『死ノ囁』」

「じゃまず一つ、『死』って何だよ？！読めねーよ！」

「死はちって読むみたいだね、ボクも読めなかったよ、んーこれは… 多分、」

「多分、なんなんだ、これ？」

「エヴァの影響だね… これは」

「ああ… エヴァか、なるほど、最近また流行ってるし、僕はEOEが一番好きだけだな」

「ボクと姫也くんが一番最初に二人で見に行った映画だね」

「なっ？！まあ、『死』の話と作者の中二病の話はここまでにしていて…」

「あ、話そらした」

「サブタイの『灰ノ瞳』がまだ出てきてねえのに、なんでサブタイにもってきた!?!」

「『リアけもの』は一人のキャラの話が三部構成になってて1部のサブタイが『キャラ名』2部が『仮物の名前』3が『そのキャラの作中の立ち位置』ってことになってる、んだって作者から聞いたけど」

「お前、作者と面識があるのか?!」

「ちよっとね、って、そこ食いつくとこ違うよ姫也くん!」

「あ、そういうえば、1部が始まる前の前書きって必ず僕の見ている夢から始まるよな」

「あれは、一話がよく分からない『悪夢』で、四話が『ウルトラセブンの最終回』で七話が『マクロスF』だよな?」

「うーん、そういうネタ元って、作品が説明しちゃダメなのでは?」

「うん、多分、説明してから気づいた」

「というか、まだ喋らなあかんのか、僕は… めんどっ」

「もう、今回は文字量の限界で、そろそろ終わりだけど、次回からはボク一人に任せて大丈夫だよ?」

「え?!マジで!?!サンキュー甘噛!?!ちゃんとブリックパックやるからな?」

「あ!わーい!ありがとね姫也くん?あ、次回からボク一人でやるとなると、姫也くんとボクのラブラブ妄想ストーリーになっちゃうけど、いいよね」

「今すぐブリックパック返せ!!!」

UJU

仇ノ嘸 天敵

僕達はまだ、学校の屋上にいた。

昼休みの後半に差し掛かかり、太陽が雲に隠れ、屋上に影を作っていた。

「くっ… 逃げ足だけはマジで速い…」

僕は、甘嚙から券を取り返すことを断念した。

甘嚙は素早すぎて追いつくことが出来ないし、彼女が二十枚も券を集めることなど不可能だからだ。

そう、『二十枚集めると、姫也クンと一日デートが出来る券』故に、二十枚集めなければ、意味がないのだ。勝った、僕の大勝利だ。

人としてなんか負けた気がするけど。

「甘嚙、なんでもいいけど、それは一枚じゃ… ただの紙切れ、なんだぜ？」

ぜえぜえ、と息も絶え絶えな僕はブルーシートに座りながら、甘嚙を見上げる。

甘嚙ははあはあと息を切らしながら距離をとり、ついに僕が奪還出来なかった券を見つめていた。

まるで、宝物でも見るかのような瞳で…

「ん？いいんだ… ボクはこれをいつも寝るとき、枕の下に入れておくんだ」

券を財布の中に入れ、ニコニコと笑う甘嚙。

僕の横の伊丹と昴も、甘嚙の話に聴き入っていた。

甘嚙の心情は、女の子ならば誰でも気になるのであるう。

甘嚙は、それほどまでに、乙女なのだ。

だがやめてくれ甘嚙、それ以上語られると僕の良心が痛む

「そうするとね、ボクが姫也クンとデートしてる夢を見るんだ…
とても、幸せな夢を」

なんとも彼女らしい、券の使い方だった。

そして、甘嚙の表情が切ないものへと変わっていく。

そんな彼女を心配してか、僕の隣にいた昴はブルーシートから立ち上がり、甘嚙に駆け寄る。

「甘嚙、大丈夫だ。姫也もまさか金欠だけを理由にその券を発行してるわけではあるまい。きつと、そういう待つ楽しみも、姫也のサプライズなのだろう。近い内に、その夢は現実のものとなるさ」

甘嚙は昴に肩をさすられると落ち着いた様子で、表情が少しずつ明るくなってくる。

「そ、そうだよね… ボク、頑張るよ、昴ちゃん」

まるで、自分に好意を寄せる女の子に対し、凄まじく考えを巡らせてデート券を発行している少年を見つめるような瞳で、僕を見つめている

すみません甘嚙さん、昴さん、最初僕は金欠だけを理由にその券を発行しました…

「あ、ああ… 当たり前じゃないか、ハツハツハ」

僕は強張った笑顔を見せて頷きながら、胸を押さえる。

良心が痛い！

もし、タイムマシンを使用して最初に券を発行した自分に会えたらぶん殴ってやる！！

確か、一年くらい前だったはず

まあ、タイムマシンなんて便利なもの、この世界にはないのだけれど…

「ところで姫也クン、ちょっと気になったことが」

「なっ… 何だ？」

甘嚙がいきなり真面目な表情になり、思い切り現実逃避している僕に近づく。

嫌な予感がした。

彼女が真面目に僕に尋ねるとき、それは決まって面倒なことが起る前触れであった。

僕は立ち上がると、そんな不穏な空気を感じたのか、昴や伊丹までブルーシートから立ち上がり、甘噛を囀んだ。

「クラスに一人いないみたいだっただけど、誰なの？風邪？」
なんか分かりにくい日本語であったが、僕は即座に理解した。

僕のクラスには、一ヶ月前から全く登校してこない生徒が一人いる。

その少年の名は『ふで・えいぞう不出永蔵』。

暗くて周囲の人からは煙たがられていて、特に隣のクラスからは邪険にされていた。

時代劇に出てくるような名前をからかわれていることが日常茶飯事であったため、昴が何度も声をかけたのだが、一向に心を開かず、結果不登校になってしまった。

どうやら、彼は高校一年の頃に柔道部を辞めており、その後も部員達からよく、からまれていたようであった。

そして、二年になって同じクラスには柔道部部員がほぼいなくなつた。

しかし、そのしわ寄せで隣のクラスに柔道部員が集中し、隣クラスから、いじめをうけていたのである。

多分そのクラス分けは、教師達が一応彼の状況に対して考慮したもののなのであろう。

だが、それは付け焼刃であり、根本的な解決にはなっていないかったのだ。

まあ、我が高校の先生共が本気でやる気のある連中なら、クラスの中にいる顔面が包帯でぐるぐる巻きの少女をスルーするわけがないし、何より生徒（まあ、僕のことなんだが）が根城にしているこの屋上をまず閉鎖するだろう。

いかにも子供らしい考え方だとは思うが、大人なんてそんなもんだ。

そうでなければ、彼らは生きていけないのである。

そんなものにならないければいけないのは、少し憂鬱ではあるが。

「ねえ、その子、どんな子だった？」

甘嚙は首を傾げながら僕に尋ねる。

どんな奴と言われても、奴の第一印象と言えば…

「ん……　なんか、いつもアニメーションやミリタリー雑誌読んでたな、全くアニオタって奴は」

「姫也が言うのか、それ」

昴が静かに呟く。

不出は柔道部員だったが、体がかつしりしていたわけではなく、ひよる長の体型であった。

そして、全体的に地味な印象しか、僕は感じる事ができなかった。だから、思い出そうにも、どんな顔だったか、まったく思い出せないのだが。

「周りの人と距離を置いて、彼は自分の世界に引きこもっていた感じがします……」

伊丹が言うのか、それ。

と言おうとして、僕はやめておいた。

確実に地雷であろう、お口にチャックだ。

「まあ、とりあえず、これ見てよ」

甘嚙はブルーシートの上に置いてあった自分のスポーツバッグの中から、何か小さなものを取り出した

「これは……」

僕達は『それ』を凝視するが、『それ』が何であるか理解するのに、数十秒かかってしまった。

甘嚙が取り出したもの、それは携帯電話サイズの機械であった。

しかもただの機械ではなく、バッタのような形状をした、四つの脚をもつ緑色のロボットであった。

「無線で操作された、小型カメラ内蔵型の機械：　というか、ロボットだね、これは。ちょうどその人の空いた席の裏にへばりついて周囲を録画しているみたいだったから、捕まえた」

まじかよ。

というか、甘噛はとうやってこんなメカを捕まえたというのだ。

こんな機械、今の技術でも作ることは出来ないであろう。

今の世界の技術で一番動物に近いロボットといえば、四本足で歩く、デスクトップパソコン大の機械くらいである。

甘噛のもつそれは、明らかにSF作品に登場するくらいのレベルの機械であった。

「小さいですね…　大分、誰が作ったんでしょう」

伊丹が呟く。

僕は、甘噛の言わんとしていることを察した。

なぜ、彼女は空席が気になったのか、なぜこの流れでSF紛いの盗撮昆虫メカが出てきたのか。

「まさか、あいつはこんなもんが作れるほど頭も良くないし、何より、兵器じゃねえか、これ」

そう、甘噛は不登校の少年、不出がこのメカを作ったのだと言いたいのだ。

だが、ありえない話だ。

不出が機械に強いなんて話、僕は聞いたことがなかったし、もし仮に彼が天才の部類の人間だとしても、現代の科学力でこんなものを作り出すことなど不可能だ。

「そう、ありえないでしょ。でも、僕達はそのありえない現象に、いつも遭遇している」

そうだった…

僕は、僕達はいつも、そんな**仮物の事件**に巻き込まれている。あじえないもの

特に、僕なんかは本当に普通の、ごくありふれた、ただの高校生なのに、いつも、こんな事件ばかりだ。

今年度に入ってからには三度目ではあるが、正直、初めから正確に数えたら何回目なんだ、仮物絡みの事件は。

「こ、これも… 仮物なんですか？」

伊丹は恐る恐る、甘嚙の手のひらの上の機械を見つめながら呟く。

そういえば、伊丹は自分の包帯以外の仮物を見るのは初めてだったな。

「ああ、ボクの『瞳』なら分かるんだよ、例え離れていても、この機械だけ見れば、相手が仮物なんだってことくらい…」

甘嚙の両の目が、灰色に光り輝き、静かに機械を見つめる。

まるで、すべてを見通すかのような、そんな力強さを秘めた、異端の瞳。

それこそが、彼女の、甘嚙祈理の『仮物』であった。

「あ、甘嚙さん?! そ… その目は？」

伊丹が驚いた様子で、甘嚙の瞳を凝視している。

僕にとつては、顔面全体が黒い包帯で覆われていた人間の方がびっくりなわけだが。

「伊丹は見るのは初めてだったな… これが甘嚙祈理の仮物『灰ノ眼』だ」

「灰の… 眼？」

そう、これこそ彼女の仮物。

その能力は、全ての『仮物』を見通すこと。

だから、仮物が絡んでいれば、こんな小さな機械でも、彼女の瞳はその創造主を見つけて出すことが出来る。

そして、その仮物が何であるか、どのような属性のものか、弱点はどこか、解決法はあるか、など、全てのことが、甘噛には分かるのだ。

だからこそ、伊丹のケースなども、速やかに解決法を見出すことが出来たし、彼女の仮物事件解決のほぼ8割が、この『灰の瞳』頼み、といっても過言ではないであろう。

「この機械の持ち主は、閉鎖された空間にいる。ねえ、姫也クン？」

伊丹は淡々と喋り、僕を見つめた。

いつにもなく、本当に真面目な表情で。

もう、そんな瞳で見つめられると、僕も腹をくくるしかなかった。

つまり、また事件が起きているのだ…

「放課後、ちょっといいかな？」

ちょっとじゃなくて、どうせ、うんと、だろうが…

どうやら拒否権は、僕にはないようだった。

続く

仇ノ嘸 天敵（後書き）

次回 拾ノ嘸 ナナさん お楽しみに。

『第二回ウラけもの』

「みなさん、こんばんおはにちわん いやあ、ついに始まってしまいましたね、ウラけもの。今回はボク、甘嚙祈理と」

「最近作者が傷^{きず}って呼ぼうとします… こんばんわ、伊丹傷^{いたみ・べいん}、がお送りします…」

「いやあー今回で話、終わらなかったね傷ちゃん、ボクの瞳が光って終わりっていう」

「次回はみんな海に行く水着回ですって、作者が言ってましたが」

「え… 傷ちゃん、それ嘘だよ、次回もボクが活躍するんだよ！」

「そうなんですか… なんか、甘嚙さんだけ、優遇されて… ないですか？」

「うっ、顔に似合わずバツと言ってくれるね傷ちゃん… こんどから本音をバシツと言いつ放つキャラになったにかしらん」

「私は背景キャラだからいいんですけど… メインヒロインであるハズの昴さんですら三話で話が完結しているので、誰だっけそう思いますよ…」

「うっ、そんな自虐はよして傷ちゃん… それに次回の主役は私じゃなくて『ナナさん』だよ」

「誰？」

「それを言ったら、ネタバレじゃない」

「ネタバレ… ですね」

「まあ、次回はとんでもない展開になるから、楽しみにしといてよ傷ちゃん」

「私の出番はありますか？」

「うっ?!」

「ないんですね…」

「あ、あはは…」

「いいです、PSPして待ってます」

続く

拾ノ噺 ナナさん（前書き）

前回までのお話

甘嚙あまがみ・いのり祈理が主人公早乙女姫也の学校に転向してきて、彼のクラスは不登校の少年『不出永蔵ふでえいぞう』により盗撮されている、という事実**に気づく。**

そして、甘嚙は自らの仮物『灰ノ瞳』の力で、不出が仮物の能力で盗撮ロボットを作っている、**という事実を知るのであった。**

拾ノ囃 ナナさん

夕焼け空の下、僕達は街のはずれにある一軒家の前にいた。

放課後、甘嚙はどこからか調達したありったけの武器とともに、僕に協力を要請した。

小型の昆虫ロボットによりクラスを盗撮していた「不出永蔵」に話をつけるためである。

彼が住んでいる、赤い屋根の一軒家は、まるでのび太君の家のような間取りで、敷地に入ったすぐ先に玄関があり、正面から見ると二階の窓が一つだけあった。

気になるのは、カーテンで閉ざされたその窓だった。

奴は、『不出永蔵』はきつとその窓の中の部屋にいる。

そして自分を傷つけるものを、カーテンと扉で締め出したのだ因みに、なぜ、僕たちが彼の家を知っているのかというと、甘嚙が個人情報をおそらく非合法な手段で調べたからである。

まあ相手は仮物を使う盗撮魔なのだから、問題はない、ハズ。

「大分片付けたな… つうか何体めだよ」

そして、僕と甘嚙の周囲には、無数のロボットの残骸が転がっていた。

まるで西洋の人形をそのまま人間サイズに大きくしたような、ロボットであった。

全てのロボットが同じデザイン。

金髪で外人さんみたいな顔の造形。

衣類は最低限のものしか着てないようで、個体がフード付きのパイ

カーとズボンを履いていた。

こいつらは、僕と甘嚙が家の周辺にたどり着いた瞬間、行く手を阻むかのように一斉に襲い掛かってきたのだ。

武器は所持しておらず、手刀と足のみを武器としているらしく、人海戦術で僕たちに接近しようとしていた。

しかし、僕たちは接近される前に手持ちのマシガンなどの火器（甘嚙が調達してきた）で、このデク人形達を打ち抜いていた。

しかし、耐久性がそれなりにあるこいつらはマシガンの弾丸が貫通しても行進を止めず、ゾンビのように這ってでも僕と甘嚙に接近しようとしていた。

だから一体につき、十発以上弾丸を撃ち込まないと倒せないという、かなり難儀な敵であった。

なんとなく、少し服装が地味なバービー人形相手にバイオハザードをやった気分だ…

「合計32体、こっちは装甲服アクティブアーマーの耐久性が限界。所持してた火器も残弾はゼロ。もうちょっと、武器持ってくればよかったかな？」

そして、甘嚙は全身（顔面さえも）覆い尽くしている分厚い装甲服を脱いで、黒いブレザーの女性の制服の姿に戻った。

この甘嚙が使っていた装甲服というのがまた物騒な代物で、バービー人形に攻撃される度に黒いウロコのような装甲が爆発して、中身の甘嚙を守っていた。

見た目は、ただの黒くて丸みを帯びた宇宙服といった感じで、デザイン性のカケラもないが。

だがそんなものでも、彼女は着れるだけマシである。

僕は特に学ランのままであった！

ふざけんな甘嚙！

「っていうか… まあ、いいか」

言いかけて、僕は止めておいた。

そう、こんなに過剰なまでに武器を持ってこなくても、不出の護衛用であるこのロボット達を倒す方法は、他に一つだけあった。だがそれは、使ってはいけない方法であった。

そして今僕が言おうとした愚痴は、僕が言ってはいけない愚痴であった。

例えそれを聞くのが甘噛だけだとしても、それだけは、言っはいけない言葉だった。

「あ、今、『昴ちゃんがいれば楽なのに』って言おうとしたでしょ？」

さすがにこいつは察しがよかった。

僕の甘えなんか、既に、お見通しである。

困ったもんだ。

僕は確かに、北王子昴が戦ってくれば、こんな銃火器を振り回さずとも、マネキンバービー軍団など昨日のレインボーサムライのように、一瞬にして倒せるのだ。

人間じゃないから破壊してもいい分、彼女も力加減が楽であろう。

「まあ、さすがにちよつとな…」

僕はそっぽを向いて答える。

もう会話を打ち切って、早く眼前の家に飛び込みたかった。

「うーん、昨日彼女が戦ってないのなら、今日戦ってもよかったんだけどね」

甘噛は首を傾げながら眉を寄せ、難儀そうに答える。

「連戦したら、更に強くなっちゃうもんな、あいつ」

「そう、『赤ノ髪』は彼女の体を侵食し、際限なく強くなっていくから。どんどん、『普通の人間』から離れていく」

そう、彼女の力におんぶに抱っこ状態ならば、こんなハリネズミのように武装しなくても、安全にこの家の中に突入出来るのだ。

だが、それは出来ない。

彼女が僕を守るように、僕は彼女を守らなければいけない。
彼女が『赤ノ髪』と同化してしまった責任の一旦は、僕にあるのだから。

だから、早乙女昴は今、伊丹と一緒に街中で遊んでいる。
まあそれは、もし不出が刺客を放った時の、伊丹の護衛も兼ねてあるのだが。

そういう采配も全て、この甘嚙が考えているのだから、味方ながら恐ろしい。

甘嚙は自分の仮物『灰ノ瞳』で仮物の弱点を知り、敵の裏をかき、最も有効な手段を考え、広い人脈で武器や情報を仕入れ、そして自らも皆を守るために戦う。

だから、昴が最強だとすれば、甘嚙は『最凶』なのだ。
全ての仮物の『天敵』と言っても過言ではないであろう。

「仮物は若い内に起こる現象だけど、仮物の中でも『赤ノ髪』は強力だから、あまりに強すぎる力は、後遺症が残らないか怖いよね…」

「
困惑する甘嚙の肩に手を添え、僕は眼前の家を見上げた。

「で、この家の中に、しつかり不出がいるんだろっな？つうか、この家の一室でよく何体もロボット作れるな」

「不可能も可能になるのが仮物の力だからね。名付け辛いけど、『不浄なる閉ざされた研究所』^{アンホーリーラボ}とでも呼ぼうかな、つまり彼はあのカーテンの向こうの部屋の中で、外界と接することもなく、昼間の機械や、さつきみたいなのを作れるんだよ」

「凄い能力だな」

僕は素直に開心した。

手に変形したり。顔が黒い包帯だけになったり、家の中が秘密基地になったり、ようわからんが、凄い能力が多いなあ、と。

「そう？ボクは嫌だな… 引きこもってたら、姫也クンに会いたく

なつて、ボクおかしくなつちゃうかも」

先ほどまでの戦闘で疲れている僕は、頬を染めて俯きながら照れる甘噛に突っ込みを入れることすら放棄した。

「そりゃどうも… とういか、どうする？」

気だるそうに砂埃まみれの制服のズボンの埃を叩いてつぶやいた、その瞬間であった

『どうするもこうするも、ご主人様は留守です』

綺麗な女の人の声が、背後から聞こえた。

「ひっ?!」

と、同時に背後からの殺気を感じた僕は、咄嗟にしゃがむ。

と、同時に、僕の頭の上を小さなナイフが横一線に通過する。

そして、次の瞬間、僕は背後の不出の家と反対側にある壁に寄って後退した。

普通に振り向いたら、確実に頸動脈を切られていたであろう。

「うわっ?!? 危なっ?!?」

甘噛は驚きの声をあげながらも一瞬の内に、不出の家から数メートル離れた電柱の後ろに隠れた。

早い、早過ぎる!

逃げ足だけは!

「なっ?!? なんなんだお前は!!」

いきなり背後からナイフで切り付けるなんて、正気の沙汰ではない!

何だ!?

何なんだ!?

本当に死に掛けたぞ!今!

しかも、僕の目の前にいるこいつは、その正気の沙汰ではない好意を、あまりに機械的にそれをやったのけたのだ

『今のを避けるなんて、やりますね。映像データの通り… やはり排除しないと』

僕は、そいつの格好に驚いた。

僕を果物ナイフで切り付けたのは、僕達と同年代の少女だった。

ポニーテールで後ろがまとめられた、艶やかな紫色の腰まで伸びた髪。

金色の少しキツそうなツリ目に、高い鼻、眉は細く、外人さんのようである、しかも無表情。

そして、ロングドレス風の黒いシンプルなメイド服、黒いハイソックス。

細いが、それでも力強さすら感じさせる体つき。

胸は伊丹と昴の中間、Bの上、くらいであろうか。

というか、そんなところ注視してる場合じゃないだろう自分！

問答無用の警告なしで殺されかけたんだぞ！

ふざける！

「質問に答えやがれ！」

さすがに感情に任せて僕は叫んだ。

夕焼けに染まるアスファルトの上に立つその女は、甘噛を一瞥した後に、僕に視線を移すと、眉間に皺そ少しだけ寄せ、無表情のまま口を開いた。

『私は戦闘用人型機械七三式。ご主人様からは、ナナさん、と呼ばれています』

不出の家を背にした少女は名乗りと共に、ナイフの刃先を僕たちに向けてきた。

あくまで、僕たちを倒すつもりだ。

というか、こいつもロボットなのか。

あまりに人間に近い姿をしていたえので、普通に人間だと勘違いし

ていた。

ななさんしき

七三式だからってナナさんかよ、なんつーネーミングセンスだ。

「出会い頭に刃物振り回すセクサロイドか… なんかボク、帰りたいくなってきちゃったな」

甘嚙は完全に引いていたようであった。

それもそうだが、不出は盗撮魔だっただけでなく、こんな趣味全開なロボットまで作る引きこもりなのだから。

関わりたくないのも、分かる… だが

「お前が言いだしっぺだろうが！」

というか女の子ならセクサロイドとか平気で口走るな！

僕は既に数メートル離れた電柱の後ろで完全に逃げる体勢の甘嚙に叫ぶ。

「えーだって、学校が盗撮されてるんだもん、嫌だよ。しかもこんな趣味全開のロボット作っちゃう人に」

甘嚙は眉を寄せて、困惑した表情で僕を見つめた。

完全に、僕に任せて、自分はナイトに守られるお姫様のポジションのつもりだ、こいつは。

つうか、こういうメンタル的部分は所は本当に女の子だよなあ。

『ご主人様の悪口を言うな』

ナナさんとやらは、甘嚙を睨み付け、明らかに怒りの表情になった。それはさっきまでのバービー人形にはない機構であったため、僕は少し驚いた。

未だに僕たちの周囲に転がるゾンビバービーは、最後の最後まで、完全に無表情だったからだ。

「あ、ゴメン、ボクはとりあえず消えるね！！」

危険を悟った甘嚙はそう言うと、どこから取り出したロープをかぶり、まるでカメレオンのように、周囲の背景と同化して消えていった

「あっ消えやがった！！」

『ま、まさか光迷彩？ひかりめいさいなぜ一般人がそんな兵器を？！ご主人様なら

いざ知らず、あんな少年が！』

光迷彩とは、今アメリカ軍が開発を進めているという噂の兵器で、周囲の風景と完全に同化できるSF紛いのアイテムである。

僕もアニメでしか見たことがなかった。

「あいつの知人が作ったんだとよ！！」

全く、ホントによくわからない人間関係を築いているよ甘噛は。

まあ、僕もその人間関係の一人なんだが。

『ところで、あなたも、逃げ出すのですか？あの少年のように……甘噛を目で追うことを諦めたナナさんは、僕を睨み付けて、再びナイフを突きつけてきた。』

この言葉は多分、挑発のつもりなのだろう。

やれやれ、本当に血の気の多い機械だ、全く。

面倒くさい。

本当は今日、放課後にTATUYAに寄ってDVDを借りようとしたのに（火曜はレンタル半額なので、お得なのだ）、それが、バイオハザードもどきと、メイド服のロボットとの戦いで一日が終わろうとしている。

まあ、そんなことを言っていたら、昨日の放課後も本屋で漫画を立ち読みしようとしていたのに、授業中の段階から、変態侍に拉致されてしまい予定がパアになってしまったのだが。

だが、まあ仕方ない。

やるしかないのだ、僕は。

もう甘噛が調達してくれた火器はさっきまでの銃撃戦で使い果たしてしまい、健康な体しか武器が残っていないが。

だが、僕はやらねばならないのだ。

甘噛や昴や伊丹などのあられもない姿が、不出に盗撮されてしまっていたのだ、そんなバカな話はない。

僕は、不出の奴を思い切りぶん殴らなければならない。

そして、彼に謝罪させなければならぬ。

そのためには、立ちほだかるものを排除しなければならない。

それが例え、刃物で武装したロボットであつたとしても。

「ったく、そうしたいのは山々なんだけどさ… 守んなきゃいけないからな、僕は」

そう、守らなきゃいけないものが、僕にはある。

だから、僕は戦う。

だから、僕は戦える。

仮物とか、そういうた力の一切ない、ただの人間である僕が。

「見せてやるよロボット、人間の戦いってやつをさ」

僕は啖呵を切り、立ちはだかる敵に向かって一気に駆け出した。

つづく

拾ノ壱 ナナさん（後書き）

第三回 ウラけもの

「なはは、始まってしまいましたね、第三回ウラけもの、こんおはばんちは みんなの恋人、甘嚙祈理と」

「やあみんな、本作のメインヒロイン、北王子昴だ」

「おつ、昴ちゃん、強調しますねそこ」

「ああ、私がメインヒロイン、と、作者は言っていたのだ。確かに、そう聞いたのだ」

「あ、落ち込んだ」

「…… ふふ、甘嚙よ、私だってな、落ち込むことくらいは、あるんだぞ？」

「確かに、今回、昴ちゃん出番ないんだよね……」

「まつ、気づいてはいたんだが…… 第一話のタイトルが『北王子昴』でない時点で。まあ、落ち込んでいても仕方ない、私のターンがきくと来ると信じよう」

「あ、そうそう、今回は初っ端から、ロボット軍団とボクと姫也クンの戦いがはしょられていたね」

「バービー人形とマネキンを合わせたようなロボットがゾンビのよ
うに群れを成して襲ってくるのか、確かにそんなシーンは端折って
正解だったかもな、因みに私は… あまり戦いたくないな、そんな
人形とは」

「怖かったよおーあれは！撃っても撃っても倒せないんだもん！」

「甘噛も、どこからそんな武器を揃えてくるのだ？公安九課か？」

「ん？ああ、全部ハンドメイドらしいよ、ボクの知人が作ってる」

「よくわからない人間関係だな…」

「あ、それより、昴ちゃん、姫也くんにバレンタインチョコあげた
？」

「ああ、あげたさ… だが、そんなおいしい描写、本編中にやって
ほしかった」

「ねー！！なんでもこの作者、『バレンタインダイ』ってタイトル
でリアけものの番外編やろうとしたんだってよー！」

「ど、どんな作品なのだ…」

「んーとね、ボクがホレ薬入りのチョコを姫也クンに食べさせて、
薬の効果で攻め攻め状態になった姫也クンにボクがひん剥かれちゃ
う、って話。オチはその光景を目撃した昴ちゃんが姫也クンをぶん
殴るという… まあ、執筆が2月14日に間に合わなくて、ボツに
なっちゃったけど、ね」

「また甘嚙のターンか」

「あ… あはは、ボツになって良かったのかもね、あはは」

「甘嚙… だが私は、諦めないからな」

「ふふっ、いいよ昴ちゃん。ボクも負けないから、君にも、妹ちゃんにも」

「ん？そういえば、姫也の妹がまだ出てきていないな、早乙女姫也をめぐる四角関係の中の一人だというのに」

「妹ちゃんはキャラが濃いからねえ、拾参ノ嘶からが妹ちゃんのおつて聞いたけど」

「私のターンはいつだ」

「… 多分、拾六ノ嘶から？でもね！！昴ちゃん！この作者は読者の声を凄く参考にする人だから、アンケート次第で、登場回が増えるかもよ？」

「ふふっ、さ、帰って、ひたぎクラブのBDでも見るか…」

「ああつ、ついに昴ちゃんが現実逃避を… みんな！！今回はこれまでです！！ちょっと待ってよ昴ちゃん！！」

続く

拾老乃斬 戦闘用人型機械七三式

夕日が沈み行く町の中、僕は、七三式ナナさんへと駆け出した。とりあえず近場にあった石を取り、彼女の綺麗な顔面目掛けて投げつける

「ふっ、これが貴方の戦い方ですか？」

顔面直撃コースの石ころを腕でガードし、七三式は迫り来る僕に向かってナイフを突き立てる。

そう、僕は基本、正攻法で戦わない。無理だからだ。

仮物の力をもつ人間と正面から正々堂々と戦うとしたら、はつきり言っただけで常人では全く太刀打ちが出来ない。

だから僕は基本相手は顔面を狙うし、男だったら股間も平気で蹴り飛ばす。

でないと、おそらく僕は昨日のレインボーサムライにすら瞬殺されてしまうであろう（まあ、あいつはトイレで不意打ちするぶん、僕よりも卑怯だが）。

ストイックなまでに洗練された卑怯。

それが、僕のメンタル的な部分ではない唯一の『強さ』であった

「まさか素手で何の策も無しに、武装した殺人口ポに勝とうとは思わねえよ！」

僕は学ランを瞬時に脱いでねじらせ、果物ナイフを受け止める。

そして、ナイフを持つ七三式の腕を蹴り飛ばした。

「ふん、貴方は勝てません、なぜなら守るべきものがある私は強いからです」

ナイフを弾かれた七三は体勢を崩す。しかし、次の瞬間、僕の鉄拳を背後に避け、七三は大きく距離をとった。

その少しの時間に、僕は背後にある、弾丸を撃ち尽くしたマシンガンを広い、銃口の部分を持ち、こん棒のように構えた。

まあこんなものでも、素手よりはマシか。

確かに、守るものがある奴は強い。

だから、多分、こいつは昨日のサムライよりは、確実に、強い。

「貴方はただ、いいように女の子達に使われているだけ、情けないですね、ふふふ」

嘲笑し、七三式は僕に向かって再び駆け出し、鉄拳を繰り出す。

「甘噛が、北王子が、伊丹が盗撮されるなんて事態は避けたいんでね、女を守るのが男の子の本懐なんだよバーカ！」

僕はその一撃をマシンガンで防ぎ、彼女の顔面目掛けてヘットバッドを放つ。

恐怖からか、言葉遣いが乱暴になる。

『ぐつ！一人は男の子でしょう！』

ヘットバッドは七三式の顔面に減り込む、調度、アゴの部分にクリティカルヒットする。

彼女のアゴは完全に外れ、だら。

今のは非常に惜しかった。

人間なら既に気絶している所だが、生憎相手はロボットであり、人体とは全く違う構造をしている。

本当に、こいつはどこを狙えば倒せるんだ？

「さつきも思ったが、よく知ってるな」

僕は彼女のカウンター攻撃である垂直チョップを、紙一重で避ける。

今は、本当に危なかった！
首の骨を折られる所であった！

『バカな子よね、どれだけ君に尽くしても、男の子ってだけで、もうアウトなのに』

七三式は再び僕と距離をとり、不自然に凹んだアゴのパーツを力づくで元の部位に戻していく。

そっだ、甘噛は逆立ちしたって、男の子なんだ。

女の子には、なれない。

そして僕は、男には、興味がない。

だが、僕はいつには言われなくなかった。

人間でもないし、アゴ外れても自力で直せるし。

「…」

だが僕は、それでも奴に返す言葉がなかった。

『機械ですら女の子の形さえしていれば、私だっご主人様に寵愛されているのに、哀れよね』

そうなのか。

やはりこいつはセクシャロイドなのか。

なら、もっと弱くてもいいだろ！

なんで引きこもりが作ったダツチが、こんな強いんだよコラ！

「いや、お前のご主人とやらはお前しか抱く相手がいないだけだろ
う、哀れなことだ」

僕は甘噛をバカにされたので、正直頭にきていた。

七三式が、アゴパーツを直しているため、僕は呼吸を整えていたのだが、声を荒げてしまっている。

だが、声が枯れても、呼吸が乱れても、戦いに不利になっても、僕は甘噛をバカにする奴が許せなかった。

『…？』

七三式は眉を寄せて、いかにも不快そうな表情で首を傾げる。既にアゴは直つたらしく、あるべき位置にしっかりとついていた。

「むしろ、抱く相手がいなかったから、お前を作ったんじゃないのか？女の形に」

僕は挑発と甘噛をバカにされた怒りの意味を込めて、眼前のセクシヤロイドに向かって叫ぶ。

夕日が沈み行く町の中で、僕達の影が少しずつ大きくなっていく

『死にたいみたいです… いいわ、死になさい！！』

感情に任せた僕の挑発は、以外にも効果絶大だったようだ。

七三式は明らかに今までの姿勢と違い、全身に力を入れすぎている。そして彼女は先程までの無駄のない動きから一変、両手を固く握りしめ三度、僕に向かって全力で駆け出した。

だが、それは僕の狙い通り。

全力で走っている、ということは、咄嗟に左右前後に攻撃を避けられない、ということでもあるのだ

「やだね。僕は女の子達のためにも、負けられないんでね！！」

僕は横つ飛びに、彼女の突進を避ける。

やはり彼女はスピードを上げた代償として、反応が追いつかなくなっている。

今の彼女の攻撃なら、なんとか避けることが可能だ、ならば

『あら？私も女の子よ』

「お前は女の子じゃない、機械だ！！」

再び突進して拳による突きを繰り返す七三式。

僕はズボンのポケットに手を突っ込み、その一撃を左に避ける。紙一重、のハズが、その一撃の衝撃波で僕の左の頬が切られ、思い切り出血した

しかし僕は怯まず、ズボンのポケットから取り出したピンポン玉サイズの小型爆弾を彼女の顔面に投げつけた

『くっ……やるじゃないですか、私と徒手空拳で互角に戦った相手はあなたくらいしか、いませんよ?』

小型爆弾は着弾と同時に粘着質の液体を出し、不敵に笑う七三式の顔面に完全にくっついた。

『まあ……こんな武器を隠していたなんて、少し意外だったですけどね』

「動くな!動くと爆発するぞ!」

そう、僕は最後の武器を隠していた。

マシンガンなどは全て使ってしまったが、実は、まだ爆弾があったのだ。

『だから?』

七三式は氷のように無表情になると、その武器をもともせず、僕の息の音を止めようと動き出す

「なぜ、お前が女の子じゃなくて機械なのか、分かるか?」

七三式は顔面の半分の肌が裂け、眼球にあたるパーツが吹き飛び、完全にアゴが砕けても、それでも僕に向かって鉄拳を繰り出す。

そんな彼女に向かって、僕は拳を構えたまま、問い掛ける。

全く、ゾンビのようなバービーロボットの親玉はやはりゾンビだな

…

『聞き流してあげたのに、蒸し返すのね。よほどの死にたがりなんですね!』

彼女の鉄拳は、完全に宙を切った。

もう既に半分の眼球を失った七三式は、正確に僕を狙うことなど出

来なくなっていたのだ。
だから、満身創痍の僕でもその一撃を避けるのは、比較的容易であった

「甘嚙祈理の女心を… 全く理解してやれないからだよッ!!」

僕は、残りのありったけの力を拳に込めて、怒りに任せた一撃を七三式の顔面にぶち当てる。
決まった。

完全なる、クリーンヒットであった。

と、思った、瞬間であった

『きゃあああッ?!』

悲鳴をあげる七三式の上半身は今の一撃により、腰から外れて吹き飛ぶ。

メイド服のスカートをはいた腰と綺麗な足だけが、僕の眼前に残る。そして、その腰から生えている、人体で言うところの背骨のパーツが變形し、細長いレールガンが展開された。

ただの銃弾である可能性もあるが、砲の先端が火花を散らしているから、多分レールガンである、ハズ。

不覚だ、ロボットなら武器が内臓されていたとしても、何の不思議もないというのに。

『はい残念でした、確かに女の子じゃないから、上半身レールキャノンに變形しちゃった』

すまないレインボーサムライよ。

僕の中でお前がビックリドッキリ變形人間部門第一位だったんだが、どうやらその記録は更新されそうだ。

上半身が外れて、尚且つ背骨がレールガンになったら、掌になる奴

よりも凄いだらう？

多分。

あ、いや待て。

七三式は機械だから、そもそもその部門での優勝は無理か。

そして、ビックリドッキリ変形した七三式のその砲身が、僕の顔に突き付けられた

「今まで悪かった甘噛……」

余裕をかましている暇など全くないのに、レインボーサムライなど思い出していた僕が馬鹿であった。

いや、今のは走馬灯だったのか？

だとしたら、もう一回やり直してくれ。

僕にとつて、サムライは死に際に見るほどの主要キャラじゃない。

そして今、僕はなぜ甘噛の名前を口走っているんだ？

とにかく、どの道この距離では回避は絶対に不可だ。

確実に、死んでしまう。

『ゲームセット』

「俺は、お前が」

末期の言葉、最後の告白すら砲撃の際に生じる電流の甲高い音に掻き消される。

零距离での砲撃であったため、レールガンの弾丸は電流を帯びて火花を散らしながら、発射と共に完全に僕の体に着弾した。

悪夢のような、現実であった。

いつもの冒頭の夢オチならまだしも、これは本当に現実なのだ。

そう

僕はその瞬間、死んでしまったのだ。

彼女から発射された巨大なレールガンの弾丸は、喉元を貫通する。と同時に、おびただしい量の血が、夕日に染まるアスファルトの上にバラを咲かせた。

そして、僕の首から上は根こそぎ胴体から離れて空中に飛び、いやな音をたてて道端に転がり落ちる。

理解出来ない。

反応出来ない。

復活出来ない。

直視できない、しようとしても、もう既に来ない。

僕は既に、息をしていない。

意識もなければ、脈も打っていない、心臓も脳も、完全に止まっている。

僕は、完全に死んでしまったのだから。

僕の全てが、無に還っていく

次回につづく

拾老乃斬 戦闘用人型機械七三式（後書き）

第4回ウラけもの

「H A H A H A H A ! ! 今回は私こと、レインボーサムライと」

「戦闘用人型機械七三式、通称ナナさんが、ウラけものを乗っ取りました、ふふふ」

「つつか、マジで死んじまったなサオトモ姫也!! 私が手を下すまでもなつたな!! カーツカツカツカ!!」

「竿友なんて、なんか卑猥ですね。というか、あなたの目的は竿友さんを倒すことではないでしょう?」

「お、そうそう!! 私は最強の存在、北王子昴をブツ倒すことが目的だ!!」

「まあ、姫也とかいう人が死んだから、北王子さんって人はもう、戦えないでしょうけどね」

「なら、消去法で私が最強だな」

「そういうものなのですか?」

「戦えない時点で最強じゃねーし、私はまだまだ戦えるんで、私が最強だろつどう考えても!!」

「まあ、そういう事にしておきましょう」

「ところでY O、次回からマジでどうすんだよ、主人公死んじゃったZ E?」

「まあ、希望を抱いている人がいるのだとしたら、諦めて下さい。私と戦った早乙女姫也という少年は完全に死にました。私の隠し武器、背骨型レールガンの一撃により、彼は死んだのです。彼は仮面ライダーやジャンプ作品の主役ではないので復活はしません。作者が言っていました、『リアケも（仮）』は死んだ人間が復活するような作品ではありません」

「なら、次回から私が主役でよくないか!? タイトルは『サムライレインボー』で」

「そういう話は主人公復活一発逆転フラグな会話ですが、まず復活はありえないし確実に死んでいるんで、まあいいでしょう、次回からは、私とご主人様の物語になりますわ、ふふふ」

「あーあ、なんか釈然としないけど、仕方ねえよな、姫也は人気ねえし主役交代やむなし、カーツカツカツッカ!」

「なんですかそのアシユラマンみたいな笑い方は」

「いや気分で」

「あ、そうですね… さて、今回のウラケものはここまでにしておいて、いよいよ次回からは、新展開ですね」

「登場人物が大分変わっても『リアケもの』を、これからもよろしくよろだZ!」

「ではみなさん、また会いましょう。じぎげんよう」

拾式ノ斬 早乙女姫也を殺したもの

僕は死んでいた。

某のびた君のお家に酷似した、ひきこもり少年「不出永蔵」の自宅前の道路。

そのアスファルトの大地に、僕の死骸は倒れている。
ポブカットの銀髪。

二重のぱつちりとした（と、よく言われている）瞳。
少し縦に長い顔面。

身長は178センチ、体型は中肉中贅。

どこをとっても、どこにでもいる、普通の容姿であり、特徴がないのが特徴、とよく言われる。

戦闘中に脱衣したため、赤いTシャツに学ランのズボンだけ身に着けている。

だがそれはもう、早乙女姫也ではなかった。

その人の形をした塊は、もう、僕ではないのだ。

夕焼け空が、その僕だったものを更に赤く、赤く染めていた。

『ゲームセット、思ったより手強かったです』

黒くシンプルなメイド服のスカートに、黒いハイソックスを履いた足。

そして、その下半身から生えている背骨の形をしたレールガン。

それが今、僕の死骸の前に立っている戦闘用人型機械七三式、通称ナナさんの姿であった。

上半身は先ほどの僕の改心の一撃を喰らい、家の壁際に吹き飛んでいる。

もう、それは人の形を逸脱していた。

上半身が外れても全く問題なく動くことができるメイドロボ、しかも背骨が武器になっている。

しかも感情が介在しない故に、その武器を躊躇せず人間に対し使用できる。流石は機械、といったところか。

全く、見た目も中身も恐ろしい敵だ、と、僕は思った。

だが、しかし、本当に恐ろしいのは…

「ま、確かに本当にゲームセットだわな」

僕は「不出永蔵」の家の赤い屋根の上、二階の部屋の窓の前にいた。そう、本当の、真正正銘の、紛れもない、人間、早乙女姫也である。ポブカットの銀髪。

二重のぱっちりとした（と、よく言われている）瞳。

少し縦に長い顔面。

身長は178センチ、体型は中肉中贅。

どこをとっても、どこにでもいる、普通の容姿であり、特徴がないのが特徴、とよく言われる。

そして上下に学ランを着た、いつものスタイルの僕である。

「なっ?!」

さすがに、七三式は驚きを隠せないようであった。

上半身が吹き飛んでいるため表情は分からないが、七三式の下半身は明らかに動揺を超えて、混乱している。

上半身は相変わらず、吹き飛んだままであったが。

「いやぁー作戦通りだったね、ここならナナさんは攻撃出来ないし、何より僕達がその気になれば、君のご主人様を攻撃出来る」

僕の隣で、甘噛祈理は姿を現す。先ほどの光迷彩を解除し、この屋根よじ登るために使用したロープをスポーツバックの中に片付けていた。

そして真面目な表情のまま、予備のマシンガンを取り出し、カーテンの閉められた窓に突き出す。

それは、無言の威圧であった。

すこしでも動いたら、トリガーを引き、この中の部屋にいる君の主人様を蜂の巣にするぞ、という。

「や… やめなさい！っていうか？！え！？何？！何なの？！あなたは今、私が倒したハズでは？！」

そう、この部屋には奴がいる『不出永蔵』が、確実に

だから彼女は攻撃できない。

彼女の発言通り、彼が留守であれば、彼女は即座に僕たちを攻撃できるとはなのだ。

だが、彼女はそれをしない。

つまり、彼は確実にこの家の中にいるのだ。まあ、だからこそ僕達は戦っていたわけだが。

レールガンなんか使用したら、その弾丸は僕達どころかこの家の壁すら貫通し、不出もただでは済まないであろう。

僕達は、不出を人質にとつたのだ。

甘噛は、最初からこれが、いや、これ『だけ』が狙いだったのだ。

先ほどレールガンで殺害された『偽』偽早乙女姫也は完全なる罠で、僕達が家の壁をよじ登るための時間稼ぎに過ぎなかった。

そして、その『偽』早乙女姫也というのは…

「ああ、あれね あれはボクの知人が作った、君と似たようなロボット。まあ君の方が性能は上だったようだけど」

細かい部分の説明を端折り、僕が二人いるトリックの種明かをする甘噛。

つまり、先ほどまで七三式と戦っていた僕は、実は「早乙女姫也」

の人格などのデータを完全にコピーしたロボットなのである。

それもまた、甘嚙が知人から手に入れたものらしい。

全く、こいつはドラえもんか本当に、コピーロボットじゃねえかこれ完全に。

「まっ、そういうわけだ」

理解不能であった状況を、ようやく理解した七三式はレールガンを背骨の形状に戻した。

そして、下半身だけで身を乗り出そうとしていた。

下半身だけでも跳躍し、窓際にいる僕たちに迫ってきそうな勢いである。

『ご主人様！？』

「動くな！！安心しろ、何もしやしない……」

そう、僕たちは別に、メイドロボをぶっ倒しに来たわけでも、不出をマシンガンで殺害しに来たわけでもなかった。

「ただ約束してくれ……盗撮だけはするな。学校来い、とまでは言わない……ただ、いくら自分が不幸だからって社会に迷惑かけてんじゃねえよ！！」

そう、ただ、盗撮という、卑劣な手段で社会に復讐しようとする不出少年が許せなかったのだ。

だから、それに気づいた甘嚙は考えた、どうにかして、説得する方法はないのかを。

そして、その手段は、この方法であった。

最初はロボット姫也を囿にして敵を外に引き付け、僕達は光迷彩で内部に入るつもりだったのだが、この『ナナさん』というロボットに話した方が、不出の部屋テリトリに侵入するより刺激が少ないと、甘嚙が咄嗟に判断したのだ。

本当に、甘嚙という少女は『仮物』の『天敵』である、と僕は思う。ただ、味方であるから、とてつもなく頼もしい限りなのだが、彼女

の戦術には、度々度肝を抜かされる。

味方すらそうなのだから、そんな甘噛を敵の回したナナさんとやらは今、凄まじく戦慄しているのであろう。

なにしろ、自分の一番大切なものを、人質にとられているのだから。

『 …… 』

七三式の下半身は無言のまま、ばたりと地面に倒れた。

『ご主人様は… 学校の撮影は確かにしていました、でも、女の子の裸を盗撮したりはしていません』

と、同時に上半身が腕のみでゆっくりと体を起こして顔を上げ、僕の瞳を見て首を横に振った。

もう、顔面のほとんどが原型を留めておらず、その彼女が顎をだらんとさせて謝る様は、不謹慎ではあるがホラーじみている。

どうやら二つに分裂した場合、どちらかしか動けないようである、不憫な仕様の体だ。

「あ、そうなの？」

意外そうに甘噛が呟く。

僕にも、七三式が言う事実は意外であった。

完全に不出は盗撮魔の変態だと、思っていたからだ。証拠（盗撮昆虫ロボ）もあつたし。

『ご主人様は… 学校で隣のクラスの人からイジメにあい、完全に引きこもってしまい、仮物の力で私や様々な機械を作り、三ヶ月間、一人で生きていました…… 』

俯きながら、七三式は言う。

顔面が殆ど潰れているため表情は分からないが、それでも彼女が悲しそうな感情、を抱いていることは感じた。

ロボットであるが、そういう風にプログラミングされているのである。

「じゃあ、なんで盗撮、というか学校なんか撮影してたんだよ……」

僕は疑問だった。

普通、そこまで学校でいじめを受けたら、仕返しこそすれ、ただ学校の風景を見るなんて、不快になるだけだと思うからだ。

『これはあくまで私の考えですが、風景を見て… いたかったのだと思います、何気ない学校の風景を。自分がいたかったけれど、いれなかった場所を。』

そういうことか。

彼は何も、学校の全てを嫌っていたわけではないのだ。ただ、自分はそこにいる事ができなかった。

だから、彼は昆虫ロボで、学校を、皆を見ていたのか。

「未練か、自分を排除した、世界への」

カーテンに閉ざされた窓を見て、僕は自然に銃を下ろしていた。

彼は、加害者になるような存在ではない、この七三式の言葉を、全て信じるならば。

だから、僕は銃を下ろしたのだ。

『お願いします、彼の楽しみを奪わないで下さい、そして、彼の領域^{へや}に入らないで下さい、彼にはもう、それくらいしか楽しみがないんです… お願いします』

七三式は上半身だけで、器用に土下座をしていた。

もうここまできると、彼女は人間と同じ感情をもっているのだと、僕は感じた。

機械は、人間にそこまで尽くさない。

機械は大破してまで、土下座など、しない。

「そうだったんだ、なら… ボク、悪いこと言っちゃったね」

甘噛は銃をバツクにしまい、屋根から塀の上へと跳ぶ。

「おい！甘噛！」

大丈夫と言いニツコリと笑うと、道路に下り立った甘嚙は七三式に向かい、歩いていく。

僕はその突拍子もない行動に驚き、道路に下りた。

屋根から直接跳んだため、足から全身に激痛が走る。痛い…

まだ、彼女の、ナナさんの言葉が全て本当か分からないというのに、甘嚙は疑うことなく、全てを信じたのだ。

まだ、反撃される可能性だって残っているというのに、彼女はその可能性を否定したのだ。

甘嚙は全くの無防備で、ゆっくりと、土下座を続けるナナさんに近づいた。

『何が… ですか？』

顔を上げたナナさんが、不思議そうに甘嚙を見つめる。

僕も彼女が謝る理由が分からなかった。

僕達は、良いことをしていない代わりに、悪いことをしたわけでもないと思うのだが。

「君をセクサロイドって言っちゃったじゃない？謝るよ、ごめんなさい。いきなり攻撃してきたのも、この「目」が怖かったんだよね？全てを見通す『灰ノ瞳』で、君のご主人様の領域おんやまで見てしまっただ、君が排除しようとするのも、分かるよ」

『え…？』

頭を深々と下げて、甘嚙は謝っていた。

七三式はその姿に驚き、砕けた口を半開きにして、ただただじろいだ。

「そこまで男の子のことを想えるんだから、君は女の子なんだよ。だから、失礼なこと言っちゃって、ごめんなさい」

そいいうことか。

甘嚙は、ナナさんというロボットを少女と捉えているのだ。

だから、不出に仕える彼女を馬鹿にした自分が許せなかったのだ。

そして、甘嚙は、自分の『灰ノ瞳』が相手に与える心理的な脅威も十分過ぎるほどに分かっていた。

彼女の言うとおり、『灰ノ瞳』は不出の部屋や仮物の能力を全て見通した、だから、ナナさんや、バービーゾンビ人形が過剰反応し、僕達を排除しようとしたのだろう。

ご主人を、守るために。

『あ… 頭を上げて下さい、困ります』

顔を上げると、甘嚙はニツコリと笑っていた。

それはいつもの、つかみどころのない彼女、甘嚙祈理の笑顔であった。

「体が直ったら、今度一緒に遊びに行こうよ、ボクと、姫也クン」と一緒にね」

『えっ、ですが…』

甘嚙の言葉に驚き、ナナさんは言葉に詰まっていた。

それもそうであろう。

甘嚙の提案は唐突であったし、ご主人である不出を差し置いて外の世界で遊ぶことなど、ナナさんにはできないはずだ。

「彼に、外の世界を見せてあげようよ、ナナさん。あと… メイドさんにも急速は必要だよ？」

ふふっ、と笑い甘嚙はナナさんの頬に手を添えた。

「ご主人様に… 相談しておきます」

そういって、ナナさんは一礼すると、両腕を使い、上半身だけで家の入り口へと向かっていった。

僕たち二人は、夕闇の中の家へと戻っていくその後姿を、静かに見つめていた…

だから、甘嚙祈理は完璧な美少女なのだ。

普通の女の子以上に、女の子の気持ちを分かってくれられる。

だから、好きになりそうになってしまおう自分がいる。

だから怖い、怖いけど… とてもかわいい。

そんな不思議な存在が、甘嚙祈理なのだ。

本人に言ったら、絶対調子に乗るから、死んでも言えないのだが

「なんか… スカツとしないなあ」

そんな事件も解決し、僕たちは帰り道を歩いていった。

甘嚙が焼き芋が食べたいというので、あまり気乗りはしなかったが、商店街を通過していた。

「仮物が絡んでる事件は敵を倒してハッピーエンドってほど、単純じゃないからね… 人生も、そうじゃない？」

僕の隣で、甘嚙は首を傾げて僕の顔を覗き込む。
確かに、そうだ。

仮物が絡んでいる事件は終わっても、僕たち、今を生きる人々の人生は問題や不安を抱えながらも続いていくのだ。

だから、またどこかで、仮物の事件が起こったら、地道に対処していくしかない。

そうすることしか、僕たちにはできないからだ。

どういうわけか、僕は巻き込まれる確立が高いわけだし。

まあさすがに、明日は起こってくれるなよ、連日はきついから。

「お前は時々、凄く達観したようなことを言うなあ」

「まあ、色々見てきちゃってるからね… 目がいいから」

甘嚙は、周囲を見回して、少しだけ寂しそうな表情をする。

「治らないのか？…その目」

僕は不安になり、甘嚙の顔を覗き込む。

僕は、甘嚙の仮物『灰ノ瞳』を治す方法を知らない、本人に聞いても、はぐらかされてしまう。

だから、不安だった。

「ん？灰ノ瞳これ？これが治る時は、そうだね… 多分、その時は確実に姫也クンは僕と結婚してると思うよ」

ニコツ、と笑い、甘嚙は僕に向かって唇を突き出した。

彼女が何をしてほしいかは、僕は分かっていた。道行く人々は、彼女と僕に釘付けであった。

確かに、何も知らない人には、僕が美少女にキスをせがまれている少年にしか見えないであろう、だが、悲しいかな、真実は違う。

視線が、痛い！

「あのなあ……」

僕は呆れたように呟く。

「その時の僕は甘嚙の言葉の本当の意味など分からなかった。ただ、僕は夕日をバックに彼女の華奢な体を抱きしめ、そして唇を」

僕は、ポカンと甘嚙の頭を叩く。

「勝手にナレーション入れんな!!」

甘嚙は笑いながら頭を押さえながら、小さな明かりが灯し続ける活気のない商店街を一気に駆け出した。

「へへっ捕まらないもんねー!」

「コラー!! 待て甘嚙ーっ!!」

あれ？

この構図ってリア充のカップル同士の追いかけてここにしか見えないようない……

次回につづく

拾式ノ斬 早乙女姫也を殺したもの（後書き）

第5回ウラけもの

「いやあー今回は大変でした、こんにちおはばんち！甘嚙祈理です！」

「やあみんな、ヒロインだというのに今回は全く出番のなかった北王子昂だ、今回は姫也が吹っ飛んだので、びっくりしたぞ甘嚙！」

「おっいきなりですね昂ちゃん、そうなんですよ。別にボクはぶっ壊そうと思って早乙女姫也ロボを使おうと思った分けじゃないんだけどねえ……」

「もっと早乙女姫也ロボが強ければよかったのだ、あれではオリジナルの姫也よりも弱いぞ」

「まあ姫也クンの正々堂々と卑怯なことをするファイトスタイルは完全にコピーできていたんだけどねえ、うーん、エースロボットみたいに劣化しちゃったのかな」

「いや、本物の姫也なら、脱衣し下半身を見せ付けて、相手が怯んだ隙に鈍器で殴りつけるくらいの卑怯な攻撃をするぞ」

「えーっ、さすがにそっれはないから！」

「しかし、ロボットなら、必殺技の剣があってもよかった気がするな」

「うーん、そーどすねえ」

「電撃剣スーパーサンダーボルト使ってほしかったな」

「昴ちゃん、多分みんなわかんないからその技…」

「そうか？なら、重甲気殿大圧殺なら…」

「もっと分かんないと思う」

「そんな、これがカルチャーギャップか！」

「平成生まれでしょう昴ちゃんも…」

「ん… なら、パレットナイフとかプログレッシブライフルとか」

「まあ比較的メジャーだけど、武器名間違っているよ」

「もういいよイデオン波動ガン装備すれば」

「いやあ、それはまずいよ……さて、今回は姫也クンの妹ちゃんが出るよ」

「私も登場するんだろうな」

「もちろん、ボクのターンは当分後だね」

「そうか、では次回もみんなで見よう！」

「思いつきり昭和の予告だね」

続
く

拾参ノ漸 とある日曜の朝日

僕には、妹がいる。

さあとも・ひやっか

早乙女百華、15歳。

彼女は、僕の父が再婚した義母の娘である。スタイル抜群、顔はアイドル顔負けの造形。声は、まるでカナリアのように澄んでいる。料理もプロ並みに上手いし、文才もある。

絵を描かせても、裁縫や編み物など物を作らせても、何をさせても人並み以上にできてしまう。

性格はおしとやかで、三つ指について旦那の帰りを待つような、そんな一昔前に絶滅してしまった『大和撫子』という言葉が本当に似合う完璧な少女であった。

僕がバカ兄であり、鼻屑目で見ていることを差っ引いても、彼女のスペックは普通の女子よりも数段上である。

その何でも出来る様、完璧に近い性格は若くして亡くなった僕の兄、さあとも・ひやっか早乙女姫花に似ている。

だから彼女は、唯一の自慢であると共に僕を度々不安にさせる。

僕と彼女は血は繋がってはいないが、自慢の妹だ。

ただ一点、ただ一点だけ、病弱なのだ。

いや、病強、と言うべきだろうか。

彼女は、面会に行く度に必ず一回は咳き込むのだが、それでも泣き言一つ言わず、微笑んでいる。

そして、周囲のことを考え、思いやり、いつもあたふたと動いている。

僕は、彼女の泣いている姿を、見たことがない。

だから、義理の兄である僕は、彼女に常に言い聞かせているのだ。

いつだって泣いていいんだよ、と。
無理ならすんなよ、と。

今日は日曜日だ。

僕は上下スウェットを着て、自宅の一階のリビングでテレビを見ていた。

ソファーにもたれかかっている僕は、煎餅をかじりながらふと時計に目をやると、時計は午前7時27分を指し示している。

窓の外は晴れやかな天気であった。

ところで僕は、先日散髪した。

ボブカットがまるでビートルズのメンバーのようだ、とある知人に言われたため、イメチェンを図り、少し短めに散髪したのである。なんとなく、ギャルゲーの主人公にありがちな髪型になってしまい、没個性だとは思うが、まあ、これはこれで、いい。

「姫也、似合っているな、その髪型」

僕が座るソファーの前のテーブルで頬杖をしながら、北王子昴は言う。

「ああ、当たり前だ。僕に似合わない髪形なんてないのさ」

テレビを凝視しながら、僕は素っ気無く言葉を返す。

「ふふっ、それもそうだな。姫也なら、何でも似合いそうだな」

また素直クールなこいつは、ふふっと笑いながらベタ褒めをしてくる。

僕は、そんな素直なこいつの言葉に喜べるほど、素直ではない。

「な、なんだよ…褒めても、何もやらないからな」

そんな言葉しか、彼女に返せないのだ。

「べ、別にそんなんじゃないんだから！」

「っ、ツンデレ？」

昴のキャラが崩壊した!?

「と、まあツンデレはここまでにして、さて、そろそろだな」

あ、そうか。

そろそろだな。

「お、そうだな」

時計が、7：30丁度を指し示す。

と、同時にテレビ画面に五色の全身タイツが登場し、画面狭しと活躍している。

よく言うの特撮番組、悪く言えば、子供番組が始まったのだ。

僕は、それを毎週、欠かさず見ているのだ。

「さてさて……」

僕はテレビにかじりついた。

勿論、物理的に噛み付いているわけではない。

集中して見ているしている、ということなのだ。

「今年の戦隊はどうなんだ？ 姫也的には」

昂は、サンドイッチをほお張りながら問いかける。

つうか、喋りながら食うな。

「僕はジュウレンジャーが一番好きだが、今年のはまだどう転ぶかわからないな」

次点でバトルファイバーが好きだ。

とりあえず第四話までだけで、良作か否かを判断するのは危険である。

当たると断言した作品が後半になり失速したり、ハズレと思った作品がどんどん面白くなるケースを、僕は嫌と言うほど体験してきたのだ。

だから、とりあえず今はお茶を濁しておこう。

「そうか、因みに私はウルトラマンレオが好きだ」

渋い！

つうか、それ戦隊シリーズじゃない！

「こうやって日曜朝にお前と一緒にテレビ見始めたのって、いつ頃だったか」

「二年前だな、私が平日と間違っただけで起こしに来たら、姫也がゴーオ

ンジャー見てたから、驚いたぞ」

まあ日曜なのに、平日と間違っのもどろろかと思うが。確かに、そうだったっけか。

昴と僕が日曜の朝に一緒にテレビを見始めたのは、中学三年の秋頃からだった。

今思えば、受験生だったのによく、呑気にヒーロー番組を見てたな、と思う。

「あ、終わった」

「次はライダーか、で、次がプリキュア…」

「そういえば姫也、今年は特にプリキュアをよく見ているな、毎回ブルーレイに標準録画しているし…」

「あ、ま… まあな、一応」

事実である。

さすがに、グッズを買いあさったりはしないが、確かに毎回標準画質で録画している。

標準録画をしないと、画像がぶれるのである。

「姫也は… ああいう女の子が好きなのか、参考になるな」

「プロツサム派です」

「近藤奈々さんの方が」

「本名で言うな」

「大人しめのキャラじゃないか、姫也はおとなしめが好きなんだな。つまり私か」

何でそうなる。

「マリンみたいなキャラはなんとなく甘噛みみたいな感じで苦手なんだよ…」

「でも、そんなキャラも嫌いじゃないんだろう？」

「うっ…」

その通り過ぎて、返す言葉がなかった。

「姫也は、プリキュアと私、どっちが好きなんだ？」

「ぐぬっ！？」

な、こ、こいつは… 返しにくい問いかけを！

つうか、アニメのキャラに嫉妬っ！？

昴さん、あんたすごく冷静な表情で問いかけていますが、ちょっと返し難いんですけど。

どうするか。

いや、普通に昴じゃないか。

でも、プリキュアも捨てがたい。

ううむ、何で僕は昴とプリキュアを天秤にかけているんだ！？

「… あ、昴がプリキュアになればいいんじゃないか」

「上手く流したな、姫也」

いや、流れたのか？

ふふふ、と苦笑しながら、昴は僕を見つめていた。

無論、それも仮面ライダーが始まる前の数秒間の事。

番組が始まれば、僕たちの視線は再びテレビに戻る。

そんなこんなで、僕たちの日曜の午前は、よく言えば平和に、悪く言えばだらだらと過ぎていく。

午後になる頃には、妹のいるサナトリウムにお見舞いに行こうと思う。

だから、それまでの時間は、こうしてテレビを見ていよつと思っ。キュア昴とともに…

拾死ノ噺 早乙女姫也(前書き)

今回と次回で最終回です。

捨死ノ斷 早乙女姫也

困った事態であった。

ボクにはもう、時間がなかった。

別に、不治の病で死に急いでいるわけでもないのだが、それでも、僕には時間がないのだ。

中学一年生の8月31日に、全く手付かずだった夏休みの宿題を行った時以来の、緊急事態であった。

それ以前の夏休みの宿題は、兄である早乙女姫花さおとめ・ひめかに急かされ、7月中に全ての宿題を終わらせていたのだが、その夏は兄がいない、最初の夏であった。

しかも、その年の7月の中頃には北王子昴の仮物『赤ノ髪』が発現し、少し大きな事件が起きたこともあり、僕は夏休みの宿題など、手をつける暇もなかったのだ。

彼女は、すっかり宿題を8月初旬に終わらせていたが。

その夏休み以来の、緊急事態であった。

僕は、三人の少女に、決断を迫られていた。

その決断は、僕が逃避して、逃げて、回避して、先伸ばしにしてきたものなのだけれど、今日の三人は、本気だった。

何が理由なのかは皆目見当がついている、明白だった。

状況を冷静に分析してみよう。

僕は北王子昴と共に、妹である早乙女百華の療養しているサナトリウムにお見舞いに来ていたのだが、たわいも無い会話を交わして数十分経過したその時、事態を急変させる存在が現れたのだ。

そいつは、甘嚙祈理であった。

百華の個室に僕達と同じ目的で現れた彼女は、早速、昴と百華と恋バナをし始めた。

彼女達の恋バナといえば、恥ずかしながら僕であるため、すぐさまその場を離れようとしたのだが、甘嚙は僕を呼びとめ、僕の手のひら掴んでおもむろに自分の股間に導き、重大発表をした。
いや、しゃがった。

「ボク、女の子になれたんだよ!!! … ふたなりだけど」

なんと最近、甘嚙に女性器が出現し、睾丸にあたる部分が消失した、というのだ。

胸も少し膨らんできた、というのだが、そんなことはないと思う、それは断言できる。

僕は驚愕した。

甘嚙祈理といえば、最強のスペックを誇る少女である。

天真爛漫で、どんな人にも当たり前障り無く接し、尚且つ、家事は万能。

男であっただけあって、男の好きなものを心得ている、最強の幼馴染である。

例えば、最近では僕の家朝早くに来て（不法侵入ですお巡りさん！）さっさか朝食を作り、裸エプロンで添い寝、というどこぞの、いや、九割方のギャルゲーがやってるイベントを難無く、自然にやっつてのけ、水着はスク水とか、僕が風邪の時はナース服で看病とか、とにかく健気で、男の（というか僕の）趣向を完璧に「分かってる」少女である。

もし、女の子と化した彼女が健気に僕の家朝早くから来て朝食を作って添い寝をしていたら、スク水で攻められたら、裸ワイシャツで一緒に部屋にいたら、僕の理性は完全に崩壊してしまうであろう。健康的な少年である僕が理性を保っていられたのは、彼女が完璧な

『男』であつたから、この一点だけが理由だつた。

歴史に『もしも』はないが、仮に、もし甘嚙が、小さい頃から女の子であつたら、そして、もし、昴や百華と出会う前であつたら、きっと僕は、彼女と付き合つていただろう。

彼女が男である、ということだけが、二人の間にある壁であつた。

だが、今は違う。

今の僕は、彼女だけが好きな男ではない。

昴も、百華も、甘嚙と同じくらい、好きなんだ。

だから、その重大発表を聞いた僕は、どうすればいいか、わからなかった。

しかし、事態は急変した。

僕の気持ちの整理がつかないまま、再び急変したのだ。

今度は、早乙女姫華は、負けじと重大発表をしたのだ。

さおとめ・ひゃっか
早乙女百華、15歳。

ビジュアルは、完璧なモデル体型、大人びた造形の顔で、腰まで伸びたプラチナブロンドの髪をポニーテールで結び、透き通るほど美しい色白の肌をしている。

去年の誕生日に僕がプレゼントした白のワンピースがお気に入り、今日もそれを着ていた。

声は、まるでカナリアのように澄んでいる。

料理もプロ並みに上手いし、文才もある。

絵を描かせても、裁縫や編み物など物を作らせても、何をさせても人並み以上にできてしまう。

性格はおしとやかで、三つ指をついて旦那の帰りを待つような、そんな一昔前に絶滅してしまった『大和撫子』という言葉が本当に似合う完璧な少女であつた。

僕がバカ兄であり、鼻屑目で見ていることを差っ引いても、彼女のスペックは普通の女子よりも数段上である。

そんな僕の妹である、彼女が。

妹といっても、義理の妹なのだが。

病弱だった彼女が、そのプリっとした唇を開き、言ったのだ。

「兄さんに黙っていたけれど… 私も、退所が近いんですよ。一緒に、いれますからね？」

どれを聞いた僕は、素直に嬉しかった。

彼女がこのサナトリウムを去る、ということは、それだけ彼女の体が元気になった、ということだから。

百華は常々、僕と一緒に暮らしたいと言っていた。

彼女も、僕が好きなのだ。

だから、僕が女性となった甘嚙の魅力に陥落する前に、最大級の自己アピールをしたのだ。

彼女は先に説明した通り、完璧超人で、家事は甘嚙に負けず劣らずのレベルの達人であるし、勉強も出来る、周囲への気遣いもできるし、努力家だ。

眉目秀麗、温故知新、空前絶後、絶対可憐、機動戦士、それが彼女、早乙女百華である。

そして、唯一、病弱である、という彼女のというジレンマが消えようとしている。

きっと彼女も、僕の傍にいたようになれば、甘嚙と同じようなことをするだろう。

朝食を毎日作るだろうし（療養所でも毎日作っているらしい）添い寝イベントもきつと起こすのだろう、お風呂場で鉢合わせとか、裸ワイシャツとか、そんなギャルゲーみたいなことを、きつと彼女はしてくれるのだろう、そうに違いない。

そして、彼女自身も、僕と一緒にいた方が、安心して暮らせると思う。

彼女は、僕と一緒にいられない時のストレスから、仮物が一度、出現したことがある。

甘嚙が「蒼薔薇の獣（ブルーローズテイラノ」と名付けたこの仮物は、青い薔薇の皮膚をもったテイラノサウルスで、百華の僕に『会いたい』のに『会えない』ことが原因で出現、僕を求めて、大暴走を起こし、街中を破壊した。

その時は、北王子昂が応戦してくれたため、僕は全治三ヶ月の怪我で済んだが、最強の仮物『赤ノ髪』と互角に戦えた『蒼薔薇の獣』の力に驚くと共に、百華に対し、申し訳ない感情でいっぱいであった。

普段は笑顔を絶やさない彼女が、いかに無理をして生きていたのかを、ストレスを抱えていたのかを、文字通り痛感したのだから

だから、そんな内面に凄い負担を抱えて、それでも皆の前では普通に振る舞う、健気で保護欲をそそる彼女と一緒に暮らしていたら、きっと僕の理性は崩壊する。

断言出来る、一日で崩壊する。

だから、彼女が退所出来る、というのは良い報告であると共に、僕と彼女の何かが確実にグラツと変わることを意味していた。

甘嚙と百華、どちらもかわいい女の子だ、だから、僕はこんな中途半端な気持ちでいる。

みんな好きなんだ、という、なんとも言えない気持ちを抱いている。

しかし、それだけで話は、終わらなかつた。

甘嚙、百華ときて、残る一人、北王子昂が何もビッグ発言をしないわけが、なかつた。

「私だって、姫也が好きだ。」

昴は、再び僕に告白をした。

それは彼女の、実に56回目の告白であった。

それは彼女の、願いだった。

北王子昴は、僕に好意を抱いていた。

彼女は僕が中学の一年の時、僕の兄が命をかけて助けた少女だ。

幼く理不尽な僕は、彼女のせいで兄が死んだと、憎んだ。

それが原因で、彼女は贖罪のために『力』を求めた。

最強の仮物『赤ノ囃』は僕を守るための、力だった。

それは、敵を倒せば倒すほど、強くなる力。

それは、十代の少女がもつには、あまりにも強大な力。

その力が暴走し、彼女は危うく人間の器を大きく逸脱した化け物に変質するところであった。

だから、僕は彼女と一緒にいた。

彼女は一見すると気丈な素直クール少女であるが、内面は脆くて、繊細だ。

だから、一緒にいた。

一緒にいるうちに、恋をしていた。

好きになっていたのだ。

彼女は、甘噛のかわいさが欲しかった。

彼女は、百華の。

だから北王子昴という少女は、だれよりも可愛らしくあろうと努力をした。

だから彼女は、誰よりも僕の傍らにしようとした。

そんな北王子昴の告白により、事態は次なるネクストステージへと進んだ。

「で、結局姫也くんは、誰が一番好きなの？」

甘噛がこの台詞を言った瞬間、僕は完全に逃げられなかった。三人の少女は、キラキラとした瞳を潤ませ、僕を真っ直ぐに見つめた。

そして『答え』を求めた。

サナトリウムの中の四畳半の個室の中で、僕は人生最大の決断を迫られた。

そんな、事態であった。

どんな事態だよ、と。

「一生のお願いだ。頼むから、あと二時間、くれ」

多分それは、本当に一生に一度の、願いであった。

そして、彼女達の上承を得ると同時に、僕はその前から姿を消した。妹がいるサナトリウムから飛び出し、街中をさ迷い、そして、今に至る、と

「どーすりゃいいんだよおオイ…」

僕は、学校の屋上にいた。

そして、ポケットと街を見ていた。

そんな余裕全く無いというのに、街を見ていた。

「どうもこうも、姫也さんが招いた事態じゃないですか」

淡々とした声が、背後から響いた。

「ってかうわあっ！？なんだ… 伊丹か」

顔を覆う黒い包帯が日に日に薄くなってきた伊丹は、怪訝な表情をしたように思えた。

もう口元は完全に露出し、顎の見えないライダーマンのようになっていた。

「またヨロイ元帥だと思ったんですか？」

いや、そいつの宿敵ライダーマンだと思ってました。

つつか、このビジュアルは志々雄さんのが近いか。

「まさか、つつか、何で俺の置かれてる状況を踏まえた厳しいコメントを?!」

そつだよ伊丹さん、なんで、君は僕の思考を読み取れるの？
読心術？

「姫也さん、全部喋ってましたよ」

あ、ソウデスカ。

「マジか… ああ、なんなんだろおなあゝもう」

がつくりと肩を落とす、ハンモックに腰を下ろす。

このハンモックで週間少年ヴァンプを読んで、みんなのバカ話を聞いていた昨日までの僕に戻りたい。

いや、どうせ明日からも漫画は読んでいるのだからうけど。

「姫也さん、私、思うんですけど、妹さんとは面識ないので一概には言えないんですが、姫也さんを好きな人なら、姫也さんが優柔不断で全く決断能力がないことくらい、理解していると思うんですけど」

「言いたいことが、よくわからないんだが…」

彼女の言わんとしていることを全く掴めずにいると、伊丹はやれやれといった表情で首を傾げた。

「まあ、とりあえず、彼女達は… あ、メールだ」

何か重要なことを言おうとしていた彼女は、携帯をとり、メールの内容を確認した。

よほど重要な用件なのだろう、眼前の僕など眼中にない様子であった。

おいおい、話の途中だったでしょう…

「えっ、誰から？」

メールを確認し終えた伊丹に、僕は問いかけた。

「彼氏からです」

彼女は即答した。

「ええええええええっ!？」

意味が分からなかった。

多分、甘噛女になったことと同じくらいの衝撃を受けた気がする。

「と、言いたいのには山々なんですけど違います。同じ小学校のクラスメイトだったのですが、この前ちょうど街中で会いまして、メルアドを交換して、色々相談にのってくれるんです。今のメールは、来週映画を見ようか？って内容でした」

それはもう、彼氏じゃねえかよう。

僕の知らない間に、彼女も色々あったのだろう。

あれだけ、他人と壁を作っていた彼女に男が出来るとは、よかったよかった。

「くっ、リアけものめ……」

それはあなたでしょう、という突っ込みも恐れず、僕は呟いた。

しかし彼女はクスクスと笑い、僕の手になかを握らせる。

「姫さんも頑張って下さい」

そして、彼女は携帯を握りしめて僕に背を向け、その場を歩きだした。

手の平を開くと、黒い包帯が、握らされている。

そこには白いボールペンで『something is wonderful』と、書いてあった

そして、屋上を去っていく彼女の顔面から、はらはらと、黒い包帯が舞ってゆく。

様々なサイズの黒い包帯が桜の花びらのように散ると、彼女の後頭部があらわになり、黒い長髪が風に舞って綺麗だった。

不謹慎だけど、嬉しさと共に、淋しい気持ち、胸に残る

「あれが、伊丹傷いたみ・べいん」

なんてガンダムキャラみたいな台詞でカッコつけて、腕を組んでる場合じゃなかった。
時間がないのだ。

ハンモックから離れて、歩き出そうとする僕の携帯に、メールが来た。
た。

甘噛からであった。

僕は恐る恐る、メールの内容を確認した。

もし、一人に選ばなかったら、中央公園に来てください。お口の恋人、甘噛より。

甘噛はいつから、ロツテになったのだろう。

まあとにかく、行く場所はきまった

公園だ。

僕は屋上から飛び出し学校を後にすると、公園へとつづく細い一本道を、走り出した。

「公園か……」

左右を塀があるアスファルトの道を、ひたすらに走っていると、何やら、虹色の着物を着て、仮面を被った変質者が電柱の上に立っていた。

「H A H A H A ! ! また会ったな ! ! !」

そいつの姿を、肉眼で捉えたくなかった。

とりあえず僕は目を合わせないよう、全速力を更に越えたスピードで走った。

とりあえず、相手をしたくなかった。

今はそんなことをしている時間はないのだ。

というか、今僕の視界の外にいるそいつの相手など、二度としたくないのだが。

「つつか無視すんなコラ！」

変態侍を後に、僕は颯爽と去る。
ようやく決断出来る、もう、迷いはない

十数分後、僕はようやく夕日に照らされていた公園にたどり着いた。
もう、日が沈む、一日が終わってしまう。
その前に、ケリをつけよう。

この公園は街の中央に位置しており、だだっ広い敷地内には芝生コーナーと巨大遊具が豊富にあった、のだが、昨今の事件のせいで殆どの遊具がなくなっており、今や滑り台しかなくなってしまった寂しい場所である。

そんな場所で、三人の美少女は待って…

「キサマが… 早乙女姫也か」

いてくれなかった、なんか、約束が違う。

僕を待っていたもの、そいつは、死神だった。

恐ろしい形相の髑髏マスクを被り、獅子舞のように後ろに長いマントを羽織ったそいつは、巨大な鎌を振り上げて、僕を威圧した。

「なっ、つうか… 三人はどこっ?!」

その死神は僕の問いかけなど知らぬ顔で、しかしこちらを真っ直ぐに見つめて、巨大な鎌を持ちながら近づいてくる。

「その前に聞いておきたい、貴様は… 早乙女姫也は、『北王子』
『甘噛祈理』 『早乙女百華』の三人を、比べることが出来ないくらい、大好きか？」

個人情報はどうやらダイレクトメールを送ってくる輩だけでなく、死神にも駄々漏れのようである。

しかも、こんなプライベートなことまで知っているなんて、本当に厄介な存在である。

自分の買った過去の商品を参考に、おすすめ商品を紹介して買わせようとしている某アマゾンさんもビックリだ。

「なっ…　なんで、死神に言わなきゃならないんだ！」

昂みたいに素直クールじゃないんだから、恥ずかしいではないか。

僕の問いに、不親切な死神は答えてくれず、やれやれといった感じで肩をすくめた。

そして

「言わないと、問答無用で殺す」

死神が鎌を振り下ろすと、大地に亀裂が入った。

そして、その衝撃派はまるで津波のように地を走り、滑り台をまるで割り箸のように粉碎した。

これで、この公園には遊具の類は一切なくなった。

あ、無理。

こいつには敵わない。

この死神サン、昂の『赤ノ髪』並のパワーだ、僕じゃ歯がたたない。さすが、死神。

「い、いいか？僕は素直だから答えるんだからな？別にさっきの一撃でビビって答えてるわけじゃないからな？！」

一応面子を保つために虚勢を張る。

「小さなプライドを守るための前置きはいいから、答えろ」

張った虚勢は数秒で障子のように破られた。くそつ。

「今、くそつって思ったな？」

死神が鎌をこちらに突き出し、その刃が僕に当たるか、当たらないかくらいの距離まで接近する。

僕は、あまりの威圧に、動けなかった。

どうやら、思考を読まれてるらしい…

まるで、甘嚙の『灰ノ瞳』のようである。

「はいはい、正直に言いますよ」

けだるい感じで、吐き捨てるように言ったため、死神は怪訝な様子

で再び鎌の刃をこちらに向けた。
本当に物騒なヤツだ。

「『はい』は一回でよろしい」
チツ、うつせーな。

「今、スノボの日本代表みたいなこと思ったる？」

思考がお見通しということを忘れていた。

あはは、なんて学習しないヤツなんだ僕は。

「はい、思いました。すみませんッした！」

とりあえず僕は、高校で流行っている最大級の謝罪のポーズ『土下座前転』で謝った。

「よろしい、では言ってもらおうか、お前の本心を」

僕は頭を上げ死神を見つめ、土下座の体勢から、僕は立ち上がった。

「僕は、北王子昴、甘嚙祈理、早乙女百華の三人が大好きなんだ！
半端な考えや妥協で誰か一人とくつつくなんて… 彼女達に対して
も失礼だ！！」

言ってやった。

言ってやったら、死神は少し俯き、ゆっくりと鎌を横に構えた。

僕の体を横に真っ二つにするつもりだ、こいつは。

「… じゃあ、どう三人に落とし前をつけるつもりだ、貴様は」

静かな声で、死神は問い掛けた。

「僕は一生、独りで生きる。彼女達には… 僕なんかより、もっと
相応しい男がいるはずだ」

そう。

誰も選べないならば。

僕は、三人以外の女の子を好きになることもなく、生きる。

僕は、一人でいい。

それで彼女達が、納得してくれなくても、これは、仕方がないことなんだ。

「その考えが一番自分勝手に彼女達を苦しめるといいうことが……なぜわからん!！」

死神は激昂し、僕に向かって、鎌を思い切り横になぎ払った

つづく

拾死ノ噺 早乙女姫也（後書き）

次回最終回です、ですが素直クール、男の娘は永久に不滅です！！

最後ノ斬 リアけもの

まあ当たり前のことなのだが、主人公は死なない。
まず死なない。

死ぬか死なないかの瀬戸際には立つのだが、まあ死なない。

紙一重で、死なない。

故に死神が横一線に薙ぎ払った鎌は、僕の体に触れるか触れないかの場所で、止まった。

そりゃそうだ、僕が死んだら洒落にならん。

ただ、一つだけ言える。

確実に言える。

生きててよかった

「な… なんなんだよ」

夕暮れ時を終えて暗闇となった、ただただ駄々っ子い公園の真ん中で、僕は立ち尽くした。

安心すると共に、なんなんだよこの死神は、という気持ちが胸に残った。

ホント、なんなんだよ。

「… フツ！！」

死に神が、マントを放つと、僕はその正体に愕然とした。

一瞬、本当に何が起こっているのか、全く分からない状態であった。死神のマントの中には、三人の少女が入っていたのだ

「姫也、やはり君は姫也だ… 私の大好きな、早乙女姫也だ… ち

ゆゝ」

マントの中から現れた北王子昴は何故かウエディングドレスを着て

おり、頬を赤らめて僕の唇を奪った。

一瞬であった、一瞬だけ、凄まじい柔らかい感触が、唇にしたのだ。そして

「ふふっ、ボクも大好きだよ。 姫也くん ちゅっ」

しし舞のようなマントの後ろ部分の膨らみにあたる部分には甘噛祈理は入っていたらしく、『ドッキリ大成功!』という小さな看板を持ちながら、クスクスと笑って僕の唇を奪う。

因みに彼女も、ウエディングドレス着用であった、美しい…

「うわっぶ?!」

思い切り舌が入ってるんですけど…

ドッキリするわ、そりゃ。

「お兄さま、私も大好きです… ずっと一緒にいて下さいね? ちゅ

」

その隣にいた、やっぱりウエディングドレス着用の早乙女百華が瞳を潤ませて、僕の顔を見上げ、完全に意味不明な展開と突然のチツスで何も言えない僕の唇を奪う。

「にゃうっつ?!」

なんか僕は、萌えキャラみたいに呻いてしまった。

彼女らしく、かわいらしい、小鳥がエサをついばむかのようなキスであった。

「なっ、おみやーら、なんばしよっとなね!？」

本当に、何をしているんだこの三人は?

とりあえず、意味不明だ…

「もー察しが悪いなあ 姫也くんてば、見てわかんないかな?」

ごめん甘噛、見てわかんねえ。
頬を膨らませ、甘噛は相変わらず持ってたプレートで、そんな僕の頭を軽く叩く。

「結婚式ですよ！！お兄さま」

楽しそうに、百華が小さく跳ねる。

あ、なるほど。

結婚式なのか、これは。

「でも、僕は誰も選べない」

僕がしどろもどろに喋ろうとするが、北王子昴は首を傾げる。

「日本は重婚出来るだろう、何を言ってるんだ姫也は？」

そう言い、一枚の紙を、彼女は僕に突き出した。

僕はそれを受け取りながら、ポカンとしてしまった。

その紙をよく読んだら、それは婚姻届であった。

しかもそれは通常のものではなく、女性の名前欄が三つある特殊なものであった。

勿論そこには、僕の眼前にいらっしやる三人の美少女の名前が綺麗に書かれていた。

「そ… そうか、その手があつたか！！」

ムンクの叫びのようなポーズで僕は驚く、驚かずにいられなかった。

「お兄さま、迂闊です」

そう言ってくれるな姫華よ、確か重婚が出来るようになったのはつい数年前ではないか。

「でも、いいのかよ…」

そうだ、僕がよくても、三人が三人、本当は自分だけを選んで欲しかったんじゃないだろうか。

僕が言えたことじゃないが、それが『普通』なんじゃなかるうか。

「くどいぞ姫也、私達にはもう、迷いはない… 全力でお前と添い遂げる!!」

そう言い、昴は全力で僕の胸に飛び込む。

「そっだよ!!ちゃんと三人一緒に愛してくれないと、ボク拗ねちゃうからね!!」

「ふふっ、さあ帰りましょうお兄さま、私達の家へ!!」

そして、僕は三人の美少女と共に、薄暗い街を歩き出した。

「リアけものだったのは、僕、だったんだな」

この物語は、ここでおしまい。

でも、一つだけ言いたい。

僕は兄が死んだときも、昴が化け物になりそうだった時も、あまりに苦しくて死にたくなかった。

だけど、今になって思うんだ。

死ななくて、よかった。

『リアけもの』おわり

最後ノ漸 リアけもの（後書き）

なんか最終回あたり、もうちょっと足して生きたいかなとは思いますが、とりあえず本作は完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2451j/>

リアけもの（仮）

2010年10月9日15時58分発行